

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第48集

くら おか だい に 遺 跡
倉 岡 第 2

東九州自動車道建設(西都～清武間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 X

2001年

宮崎県埋蔵文化財センター

くら おか だい に 遺 跡
倉 岡 第 2

東九州自動車道建設(西都～清武間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 X

2001年

宮崎県埋蔵文化財センター

序

宮崎県教育委員会では、東九州自動車道西都～清武間建設予定地にかかる埋蔵文化財の発掘調査を平成7年度から10年度にかけて実施してまいりました。本書は、東九州自動車道建設（西都～清武間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Xであります。

本書に掲載した宮崎市大字金崎所在の倉岡第2遺跡は、平成9年度に発掘調査を行ったものです。遺跡は、丘陵上に立地しておりましたので、A地区は、中世の城館跡関係の遺跡として調査に着手しております。調査によって中世の遺構・遺物は、陶磁器が若干出土したのみでしたが、その下層において縄文時代後期の綾式土器や古墳時代から古代にかけての住居跡が検出され、また、B地区においては縄文時代晩期の孔列文土器が出土するなど予想外の成果がありました。これらは、遺跡の立地の在り方などに再検討を促すものであります。

ここに報告する内容が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、また、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になることを期待しています。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関・地元の方々、並びに御指導・御助言を賜った先生方に対して、厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 矢野 剛

例 言

1. 本書は、東九州自動車道（西都～清武間）建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した宮崎市大字金崎所在の倉岡第2遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の依頼により宮崎県教育委員会が調査主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 倉岡第2遺跡については、調査概報などでは倉岡遺跡として報告してきているが、遺跡の東500mほどのところに倉岡遺跡と報告されている遺跡が存在することが判明したので、「倉岡第2遺跡」と遺跡名を変更した。
4. 現地での実測等の記録は調査員が行った。
5. 本書で使用した遺構・遺物等写真については遺跡担当の調査員が撮影し、空中写真については(株)スカイサーベイに委託した。
6. B地区で検出された残丘標の調査にあたって、穴戸地質研究所所長穴戸章氏の指導・助言を受けた。
7. 整理作業は埋蔵文化財センターで行い、図面の作成、遺物実測、トレースは整理作業員の協力をえて調査員が行った。
8. 土層断面及び土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に拠った。
9. 本書で使用した方位は座標北（座標第Ⅱ系）で、その他は磁北（MNと表示）である。
10. 本書で使用した遺構略号は以下のとおりである。
SA…堅穴住居跡、堅穴遺構 SC…土坑 SI…集石遺構
11. 本書の執筆は、第1章を日浅雅道、面高哲郎の二人で共同して執筆したほかは日浅雅道が執筆し、編集も日浅雅道が行った。
12. 出土遺物その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2章	調査の記録	3
第1節	調査の経過と概要	3
1	調査区の設定および調査	3
2	検出された遺構と遺物	5
第2節	遺跡の層序	6
第3節	A区の遺構と遺物	9
1	縄文時代の遺構と遺物	9
(1)	遺構	9
(2)	遺物	9
2	古墳時代から古代の遺構と遺物	13
(1)	4号住居跡	13
(2)	6号住居跡	16
(3)	2号住居跡	19
(4)	3号住居跡	21
(5)	1号住居跡	23
(6)	5号住居跡	26
3	包含層出土の遺物	28
(1)	古墳時代の遺物	28
(2)	古代の遺物	36
4	その他の遺構と遺物	42
(1)	遺構	42
1号土坑		42
ピット群		42
(2)	遺物	44
土器類・その他		44
石器		45
住居跡出土の石器		45
包含層出土の石器		45
第4節	B区の遺物	50
1	縄文時代の遺物	50
2	弥生時代の遺物	55
3	その他の遺物	55
4	中世の遺物	55
5	石器	57
第5節	C区の遺構と遺物	67
1	縄文時代の遺物	67
(1)	前期の縄文土器	67
(2)	晩期の縄文土器	67
2	その他の遺構と遺物	72
(1)	遺構	72
2号土坑		72
(2)	遺物	72
土器・土師器		72
石器		73
第3章	まとめ	79

挿 図 目 次

第1図	倉岡第2遺跡の位置と周辺遺跡	2
第2図	倉岡第2遺跡調査対象区域および調査区	4
第3図	倉岡第2遺跡A区土層実測図	7
第4図	倉岡第2遺跡B区土層実測図	8
第5図	倉岡第2遺跡C区土層実測図	8
第6図	倉岡第2遺跡A区SI1実測図	9
第7図	倉岡第2遺跡A区縄文土器実測図・拓影(1)	10
第8図	倉岡第2遺跡A区縄文土器実測図・拓影(2)	11
第9図	倉岡第2遺跡A区出土石器実測図	11
第10図	倉岡第2遺跡A区遺構分布図	12
第11図	倉岡第2遺跡A区SA4遺構実測図	14
第12図	倉岡第2遺跡A区SA4出土遺物実測図	15
第13図	倉岡第2遺跡A区SA6遺構実測図	17
第14図	倉岡第2遺跡A区SA6出土遺物実測図	18
第15図	倉岡第2遺跡A区SA2遺構実測図	19
第16図	倉岡第2遺跡A区SA2出土遺物実測図・拓影	20
第17図	倉岡第2遺跡A区SA3遺構実測図	21
第18図	倉岡第2遺跡A区SA3出土遺物実測図・拓影	22
第19図	倉岡第2遺跡A区SA1遺構実測図	24
第20図	倉岡第2遺跡A区SA1出土遺物実測図	25
第21図	倉岡第2遺跡A区SA5遺構実測図	26
第22図	倉岡第2遺跡A区SA5出土遺物実測図・拓影	27
第23図	倉岡第2遺跡A区Ⅱ層遺物分布状況	28
第24図	倉岡第2遺跡A区Ⅲ層遺物分布状況	28
第25図	倉岡第2遺跡A区Ⅳ層遺物分布状況	29
第26図	倉岡第2遺跡A区Ⅴ層遺物分布状況	29
第27図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(1)	31
第28図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(2)	32
第29図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(3)	33
第30図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(4)	34
第31図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(5)	35
第32図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(6)	37
第33図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(7)	38
第34図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(8)	39
第35図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(9)	40
第36図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(10)	41
第37図	倉岡第2遺跡A区SC1実測図	42
第38図	倉岡第2遺跡A区ビット分布図	43
第39図	倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(11)	44
第40図	倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(1)	45
第41図	倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(2)	46
第42図	倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(3)	47
第43図	倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(4)	48
第44図	倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(5)	49
第45図	倉岡第2遺跡B区表土直下遺物分布状況	51
第46図	倉岡第2遺跡B区表土第Ⅱ層遺物分布状況	51
第47図	倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図(1)	52
第48図	倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図(2)	53

第49図	倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図 (3)	54
第50図	倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図 (4)	56
第51図	倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図 (5)	57
第52図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (1)	59
第53図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (2)	60
第54図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (3)	61
第55図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (4)	62
第56図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (5)	63
第57図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (6)	64
第58図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (7)	65
第59図	倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図 (8)	66
第60図	倉岡第2遺跡C区表土直下遺物分布状況	68
第61図	倉岡第2遺跡C区Ⅱ層遺物分布状況	68
第62図	倉岡第2遺跡C区Ⅲ層遺物分布状況	68
第63図	倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図 (1)	69
第64図	倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図 (2)	70
第65図	倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図 (3)	71
第66図	倉岡第2遺跡C区SC2実測図	72
第67図	倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図 (1)	73
第68図	倉岡第2遺跡C区包含層出土石器実測図 (1)	74
第69図	倉岡第2遺跡C区包含層出土石器実測図 (2)	75
第70図	倉岡第2遺跡C区包含層出土石器実測図 (3)	76
第71図	倉岡第2遺跡C区包含層出土石器実測図 (4)	77
第72図	倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図 (2)	78

図 版 目 次

図版1	倉岡第2遺跡遠景およびA区遺構分布状況	82
図版2	倉岡第2遺跡A区遺構および遺物検出状況 (1)	83
図版3	倉岡第2遺跡A区遺構および遺物検出状況 (2)	84
図版4	倉岡第2遺跡B区・C区遺構・遺物検出状況	85
図版5	倉岡第2遺跡A区出土遺物 (1)	86
図版6	倉岡第2遺跡A区出土遺物 (2)	87
図版7	倉岡第2遺跡A区出土遺物 (3)	88
図版8	倉岡第2遺跡A区出土遺物 (4)	89
図版9	倉岡第2遺跡B区出土遺物	90
図版10	倉岡第2遺跡B区・C区出土遺物	91

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

東九州自動車道延岡～清武間は平成元年2月に基本計画がなされ、平成3年12月には西都～清武間が整備計画路線となっている。西都～清武間は、平成5年11月に建設大臣から日本道路公団へ施工命令が出され、公団では平成6年度から事業に着手している。その間、県教育委員会文化課では、平成3年度に西都～清武間の遺跡詳細分布調査を行い、それに基づき埋蔵文化財の保護について関係機関と協議を重ねた結果、工事施工によって影響部分については工事着手前に発掘調査を実施することになった。調査は、平成7年度は文化課直営で、平成8年度からは、宮崎県総合博物館から分離・独立した宮崎県埋蔵文化財センターで実施している。

宮崎市大字金崎所在の倉岡第2遺跡は、事前の分布調査では丘陵尾根平坦部が時期不詳の遺物散布地としての報告されていた。第一次の確認調査は丘陵尾根平坦部で実施し、表土下が硬く締まる淡黄褐色を呈する小粒の礫から成る層で、中世の遺物が出土している。地形的にも中世の城館跡様にも見て取れたので尾根平坦部は中世の遺跡と判断している。その後、杉などの伐採後に再度周辺の分布調査を実施したところ、北面する2段の緩斜面が確認され、打製石斧などが採集され、この緩斜面も遺跡である可能性がでてきた。その後の試掘調査でも縄文土器片なども出土したので、倉岡第2遺跡の発掘調査は、丘陵尾根平坦部および北面する2段の緩斜面を調査対象地として発掘調査を実施することになった。発掘調査は平成9年5月12日から11月8日まで実施した。

第2節 調査の組織

倉岡第2遺跡の調査組織は次のとおりである。

調査主体 宮崎県教育委員会

教育長	岩切重厚(平成9年度)	笹山竹義(平成10～12年度)
文化課長	仲田俊彦(平成9～11年度)	黒岩正博(平成12年度)
埋蔵文化財課長	北郷泰道(平成9～11年度)	石川悦雄(平成12年度)
調整担当	主査 柳田宏一(平成9年度)	主任主事 重山郁子(平成10～11年度)
	主事 飯田博之(平成12年度)	

宮崎県埋蔵文化財センター

所長	藤本健一(平成9年度)	田中 守(平成10・11年度)
	矢野 剛(平成12年度)	
副所長	岩永哲夫(平成9・12年度)	江口京子(平成11年度)
	菊地茂仁(平成12年度)	
調査第一課長	面高哲郎(平成12年度)	
調査第一係長	面高哲郎(平成9～12年度)	
調整担当	主査 菅付和樹(平成9～11年度)	主査 倉永英季(平成12年度)

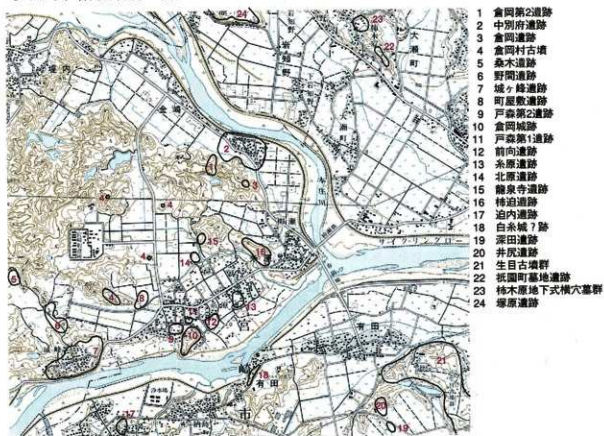
<調査担当>

倉岡第2遺跡

主査 日淺雅道 (平成9～11年度) 主査 青山高友 (平成9～11年度)

第3節 遺跡の位置と周辺の遺跡

倉岡第2遺跡は、宮崎市大字金崎寺尻ほかに所在する。大淀川は、宮崎市と国富町の境界を東流する本庄川と宮崎市西部で合流し、宮崎市下北方の丘陵にぶつかり大きく南に流れを変える。本遺跡は、その大淀川と本庄川に挟まれ、川沿いに東へ延びる丘陵上に立地する。調査地には、標高20～50mにかけて階段状の緩斜面が2か所、尾根上に平坦部が1か所見られる。調査は地形にしたがって丘陵尾根上の平坦部をA区(標高約50m)、上段の緩斜面をB区(標高約30m)、下段の緩斜面をC区(標高約20m)とした。A区の西側の一部は戦後サツマイモ畑として耕作されていた。西側調査区外にそのほとんどの残地(平坦部)があり、朝倉観音寺参道へ続く山道がある。そして、A区の南側には湧水があり、浸食が激しく崩落したと思われる急崖となっている。B区には近代の炭焼き竈跡があった。B区からC区にかけての東側谷部には湧水点が確認された。この地の土地利用は、現在に至るまで杉を中心に植林されていた。また、遺跡周辺の遺跡の分布状況を概観すると本遺跡の立地する丘陵北眼下本庄川の自然堤防上には中別府遺跡、南東の大淀川の自然堤防上には古墳時代の北原遺跡などが所在しており、自然堤防と丘陵間の沖積地には古墳時代から中世にかけての水田跡である町屋敷遺跡が所在する。また、町屋敷遺跡周辺の丘陵上などには古墳が点在しており、倉岡村古墳と呼称されている。



第1図 倉岡第2遺跡の位置と周辺遺跡

第2章 調査の記録

第1節 調査の経過と概要

1 調査区の設定および調査

発掘調査は平成9年5月12日から平成9年11月8日にかけて行った。

確認調査の際、調査区は杉などに覆われており、思うようにトレンチの掘り下げが出来ず、それでも地表面から10~20cmの深さから数点ながら陶磁器片などがA区西側より出土した。調査当初は中世の寺院跡もしくは山城跡ではないかと考えられた。

本調査は杉材切り出しおよび搬出後に行った。まず、重機により廃材などを取り除き、切り株に悩まされながらも土層確認のトレンチを設定し、土層の堆積状態を確認した。その結果、杉を中心とする植林や伐採、切り出しなどのために造成され、攪乱されているところが多いことがわかった。そこで重機により攪乱層を除去した後、人力で掘り下げ精査したものの、掘立建物跡などの遺構は確認できなかった。それに併行して、重機で、北側の小丘部分を一部掘削して土層を観察したが、地山堆積層であり土壘などの人為的・意図的な痕跡は確認できなかった。また、A区西側に接して遺跡本体ではないかと思われる残地はあるものの、それ以外は、発掘作業員数名と調査区周辺に分け入ってみたが、木々や下草に覆われ、遺物を採集することはできず、しかも遺構検出が可能と思われる様な平坦面もなかった。その後、確認のためA区の中央トレンチをより深く掘り下げたところ、約80cmの深さから黒褐色の層が現れた。精査の結果、この黒褐色の層からトレンチいっぱい古代の時期と思われる土器片が出土した。

このことから、①縄文時代後期、古代の包含層は約80cm下の黒褐色土である可能性があること、②除去しなければならない膨大な土量および切り株とその処理が必要であること等の問題が生じた。そこで、遺構・遺物への影響などを考慮に入れ、より効率よく作業を進めるために、再度、重機で堆積層を除去した。黒褐色土を精査すると、甕はもちろんのことながら、格子目の叩きのある須恵器片、黒色土器、布目痕土器、ヘラ切り離しが見られる坏の底部、土師器片など調査面積にすれば比較的多くの量の遺物を検出した。

調査はA区とB区を、天候をにらみながら並行して行った。特にA区の土壌は、地表面が乾燥すると、遺構の埋土と地山堆積層との判別がとて難しかった。しかもA区は丘陵の頂上部で散水するための水が得にくい。よって遺構検出作業は、土中の水分を活用できないかと、ビニールシートで覆ってみたり、にわか雨などの降雨後すぐ精査作業を行うという状況であった。そのため、住居の輪郭をとらえられるようになるまでに多くの日数を費やした。逃がした遺構もあるのではないかと懸念は強いが、それでもようやく6軒の住居跡が確認できたことは大きな成果であった。

B区は本遺跡の中心と考えられた。表土に残された廃材などを重機で除去した後、土層確認のトレンチを設定し、土層の堆積状態を確認した。調査範囲設定後、グリッドに沿ってトレンチ調査を行った。トレンチの断面で土層を観察したが、旧地形は起伏に富み、土層の堆積状況も荒く、A区と同様に攪乱されていることを確認した。しかし精査を進めていくと、西側谷部近くに、砂礫が集積して小丘を形づくっている箇所を検出し、石積みの塚や古墳などの遺構の可能性が考えられた。



第2図 倉岡第2遺跡調査対象区域および調査区 (1/2,000)

よって、より慎重に調査を行うことになった。この礫群の調査には従来の調査方法に加え、堆積学などの調査の手法を取り入れた。その結果、この小丘は人為的につくられたものではなく、旧河川により形成された段丘礫層の一部（残存礫層）であるとの結論を得た。これによりB区の遺構は何も確認できなかった。遺物包含層は表土直下とその下層（明褐色土）の2層であり、縄文時代晩期、弥生時代中期から後期、古墳、古代、中世の各時代の遺物が確認された。

C区は中別府遺跡に隣接し、面積は256㎡と狭く、遺跡内で最初に調査を終了した。重機で表土上の腐材などを除去した後、土層確認のトレンチを設定した。その結果、B区と同様に旧地形は起伏があり東側の谷部へ傾斜していることが確認された。遺物の出土状況もB区と酷似しているが、縄文時代前期と思われる曾畑式土器を検出した。表土直下からは近世の銭貨（寛永通宝）が出土した。また、遺構は土坑1基を検出した。

2 検出された遺構と遺物

倉岡遺跡で検出された遺構は、A区では竪穴住居6軒、集石遺構1基、時期不明の土坑1基。C区では性格・時期とも不明の土坑1基が検出された。その他A区では、ピットが検出されたが性格は不明である。また、A区の南断面の東西方向で行った土層断面観察時に、柱穴ではないかと思われる土層の落ち込みがあったが、谷部にむかう急崖地で危険が伴い、作業が困難であったため未調査に終わっている。同様に遺構検出面の上下にあって確認できなかった他の遺構が存在していた可能性も遺憾ながら否定できない。その他、多数の遺物を発見した。調査の結果A区には、縄文時代後期、古墳時代後期、古代の各時代の遺物を包含していることが確認できた。

B・C区出土遺物については、本来の位置を離れてすでに斜面上を流動堆積したと思われるので、厳密に出土位置で分けず、時代ごと一括して取り扱いたい。なお、出土石器中に縄文時代後期・晩期に多く現れる「扁平打製石斧」があるが、弥生時代の遺物等と同レベルで検出され、縄文時代の包含層からの流入遺物とは断定しがたいので、別に「石器」として掲載することにする。

第2節 遺跡の層序

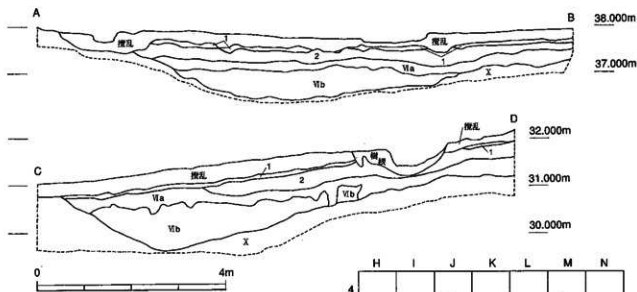
各区の層位の状況が異なるため、遺跡全体を通した基本となる層序はできず、一番残りの状態がよいA区を基本に層序を掲載する。倉岡遺跡の基本層序は以下に示す通りである。なお、A区の層序は第3図、B区の層序は第4図、C区の層序は第5図である。

- 第Ⅰ層：にぶい黄褐色土 (Hue10YR 4/3) …表土(客土)である。しまって硬い。
- 第Ⅱ層：にぶい黄褐色土 (Hue10YR 4/3) …砂質細粒土。砂岩などの細礫をまばらに含む。
- 第Ⅲ層：黒色スコリア層 (Hue10YR 2/1) …高原スコリア層。ところにより流れ込み堆積物とスコリアなどを混入した箇所が見られる。
古代の遺物包含層である。
- 第Ⅳ層：暗褐色土 (Hue10YR 3/3) …さらさらしているしまりの弱い均質砂質土。
古墳時代の遺構・遺物包含層である。
- 第Ⅴ層：黒褐色土 (Hue10YR 2/2) …さらさらしているしまりの弱い細粒土。炭化物を全体に含む。縄文時代の遺物包含層である。
- 第Ⅵ層：橙色火山灰層 (Hue 7.5 YR 6/8) …硬くしまったアカホヤ火山灰層。柱状に浸食痕を残し、上面の所々で黒変している。
- 第Ⅶ層：褐色土 (Hue 7.5 YR 4/4) …粘性があり、ややしまった層。丸い細礫を全体に含む。
- 第Ⅷ層：暗褐色土 (Hue 7.5 YR 3/3) …粘性があり、ややしまった層。礫を含まない。
- 第Ⅸ層：にぶい黄褐色土 (Hue10YR 4/3) …にぶい黄褐色土と黒褐色土の混ざりによって明暗のまだら模様を示す。
- 第Ⅹ層：にぶい黄褐色土 (Hue10YR 6/3) …細粒砂岩の小岩片を含み、砂質でよくしまった層。
宮崎層群の砂岩風化二次堆積層である。

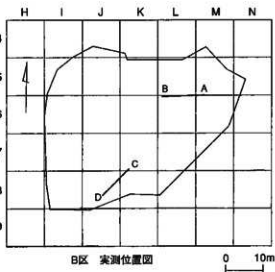
A区の現表土は幾度も杉材の切り出し・搬出のために幾度も盛土された層のようであり、いたるところに切り株などが埋め込んである。所によりⅢ層面まで攪乱されていた。

年代の指標となる火山灰として、顕微鏡観察の結果、第Ⅲ層は3つに分層され、Ⅲa層は黒褐色土、Ⅲb層は文明ボラを含み、Ⅲc層は高原スコリア層(10~20cm)。第Ⅵ層は大きく2つに分層され、Ⅵa層はⅤ層とⅥb層の漸移層、Ⅵb層はアカホヤ火山灰層(15~30cm)であることが判明した。第Ⅲa・b層は極めて短時間に堆積を繰り返された可能性が高い。古代の遺物包含層となっている。第Ⅳ層は暗褐色の均質砂粒土で、古墳時代後期の遺物包含層となっている。この層で古墳時代後期から古代と思われる竪穴住居跡を検出した。第Ⅴ層は黒褐色土層で、さらさらしており、5mm以下の炭化物を全体に含んだややしまりの弱い細粒土である。縄文時代後期の遺物包含層となっている。第Ⅹ層は宮崎層群の砂岩風化二次堆積層である。

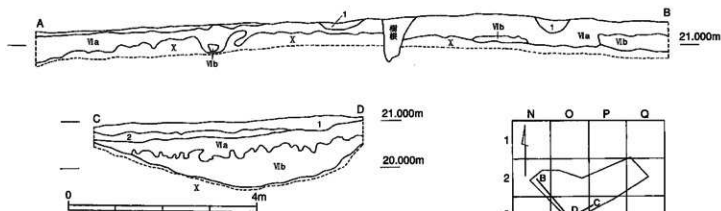
B・C区では基本層序の中のアカホヤ火山灰層の漸移層である第Ⅵa層と第Ⅵb層、第Ⅹ層が確認された。



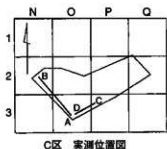
- 1 ……にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) で、ややしまっている。全体に細礫をまばらに含む。
- 2 ……褐色土 (Hue 10YR4/6) で、しまりが弱く、柔らかい。やや粘性を帯び、全体に小石をまばらに含む。
- VI a ……にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) で、橙色アカホヤを混入する。しまりがやや弱い。
- VI b ……橙色火山灰層 (Hue 7.5YR6/8)。かたくしまったアカホヤ火山灰。柱状に浸食痕を残している。
- X ……にぶい黄褐色土 (Hue 10YR6/3)。細粒砂岩の小岩片を含み、砂質でよくしまった層。宮崎層群の砂岩風化二次堆積層。



第4図 倉岡第2遺跡B区土層実測図



- 1 ……にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) で、ややしまっている。全体に細礫をまばらに含む。
- 2 ……褐色土 (Hue 10YR4/6) で、しまりが弱く、柔らかい。やや粘性を帯び、全体に小石をまばらに含む。
- VI a ……にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) で、橙色アカホヤを混入する。しまりがやや強い。
- VI b ……橙色火山灰層 (Hue 7.5YR6/8) かたくしまったアカホヤ火山灰。柱状に浸食痕を残している。
- X ……にぶい黄褐色土 (Hue 10YR6/3) 細粒砂岩の小岩片を含み、砂質でよくしまった層。宮崎層群の砂岩風化二次堆積層。



第5図 倉岡第2遺跡C区土層実測図

第3節 A区の遺構と遺物

A区の旧地形は、アカホヤ火山灰堆積層上面で20cmごとに実測したコンタ図を見ると、東部と北西・南西部が小高く、A区中央部から南部にかけて低くなっていく。遺構は、集石遺構が1基、堅穴住居跡6軒、時期不明の土坑1基検出された。その他、ピット群が検出されたが性格は不明である。遺物は、谷部にあたるB・C・D15グリッド、C・D16グリッドに集中している。その出土のピークは第Ⅲ層と第Ⅳ層であり、古墳時代から古代の遺物包含層である。また、第Ⅴ層からは少量ながら縄文時代後期の遺物を検出した。

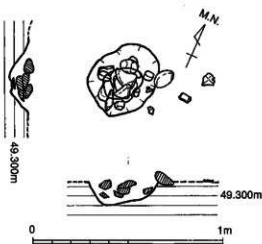
1 縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構検出面は第Ⅴ層である。遺構は、集石遺構1基を検出した。集石遺構を検出した箇所はその周辺よりもやや標高が高い所である。また、北西方向4mのところには時期不明の土坑がある。遺物は、主として縄文時代後期前半の縄式土器、石器は石錐1点と剥片2点が出土した。特に第7図の9は、ほぼ完形の縄式土器で押し潰れた状態でD15グリッドで出土した。他の土器片も谷部の地形に沿うように出土した。また、上層の第Ⅳ層でも流動堆積したものと考えられるが、石鏃5点が出土した。

(1) 遺構

1. S11

倉岡第2遺跡で唯一検出された集石遺構で、A区の北東部のD15グリッドに位置する。その付近は小丘の裾部にあたり、周辺よりもやや標高が高い。S A1の柱穴と思われるピットがこの集石遺構の西側すぐのところにある。幸いにもこのピットは集石遺構を破壊してはなかった。検出面はⅤ層（アカホヤ火山灰層の上層）である。径約40cm、深さ約10cmの浅い楕円形の掘り込みをもち、主として赤変した10～15cm程の中礫の円礫からなる焼石21個で構成されている。周囲には散石は認められない。また、この遺構は遺物を伴わない。



第6図 倉岡第2遺跡A区 S11実測図 (1/20)

(2) 遺物 (第7図～第9図)

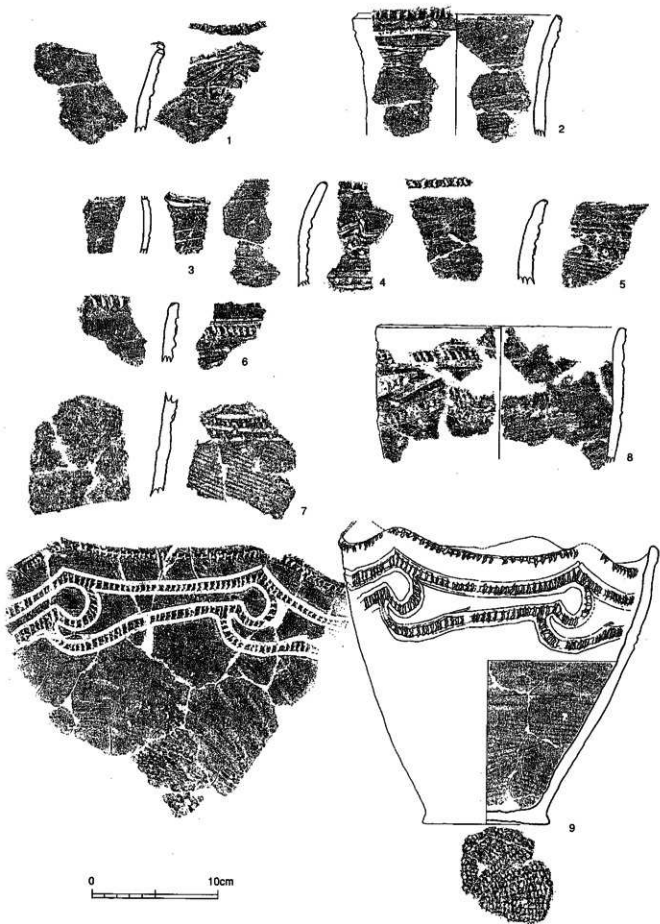
A区出土の縄文土器および石器は点数が少ないが、出土した縄文土器を施文と調整によって以下のように大まかに分類する。

甕

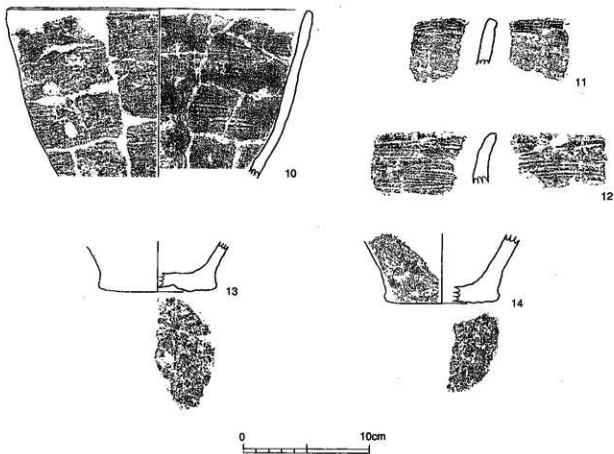
Ⅰ類 口唇部に刻目があり、平行沈線のみが見られるもの。(1, 2)

Ⅱ類 口唇部に刻目があり、平行沈線間に施文がみられるもの。

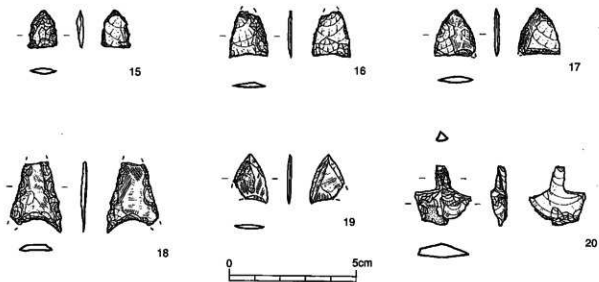
1 竹管と思われる施文工具で刺突されているもの (4, 5, 7)



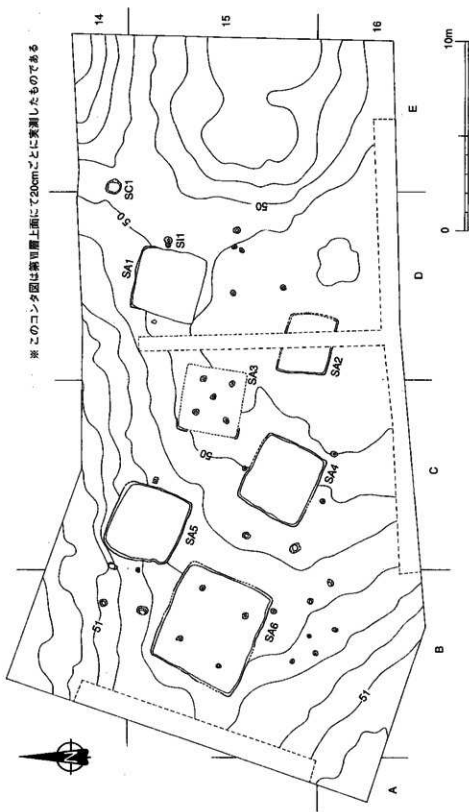
第7图 盒网第2道跡A区縄文土器実測图·拓影(1)(S=1/3)



第8图 盒网第2遗址A区绳文土器实测图·拓影(2)(S=1/3)



第9图 盒网第2遗址A区出土石器实测图·拓影(S=2/3)



第10図 倉岡第2遺跡A区遺構分布図 (1/200)

2 a 貝殻腹縁部で刺突されているもの (6, 8)

b 貝殻腹縁部で刺突されており、山形隆起(波状)の口縁部をもつもの (9)

Ⅲ類 細沈線文が見られるもの。(3)

Ⅳ類 貝殻条痕文のみが見られるもの。

1 口縁部が直口するもの (10, 11)

2 口縁部が外反ぎみに開くもの (12)

底部 (13, 14)

13は、深鉢の底部でやや底があがる。14は、深鉢の底部である。

石器 (15~20)

15は、頁岩製の石鏃で両側縁に角をもち、先端部を作り出している。16は、頁岩製の石鏃で先端部は欠損している。17は、頁岩製の磨製石鏃で両面共に擦痕が見られる。18は、頁岩製の磨製石鏃で先端部は欠損している。両面共にきれいに磨かれている。19は、頁岩製の磨製石鏃で側部は欠損しているが両面共にきれいに磨かれている。20は、黒曜石製の石鏃で側部の欠損が見られる。小型であるが鋒部は長い。

2 古墳時代から古代の遺構と遺物

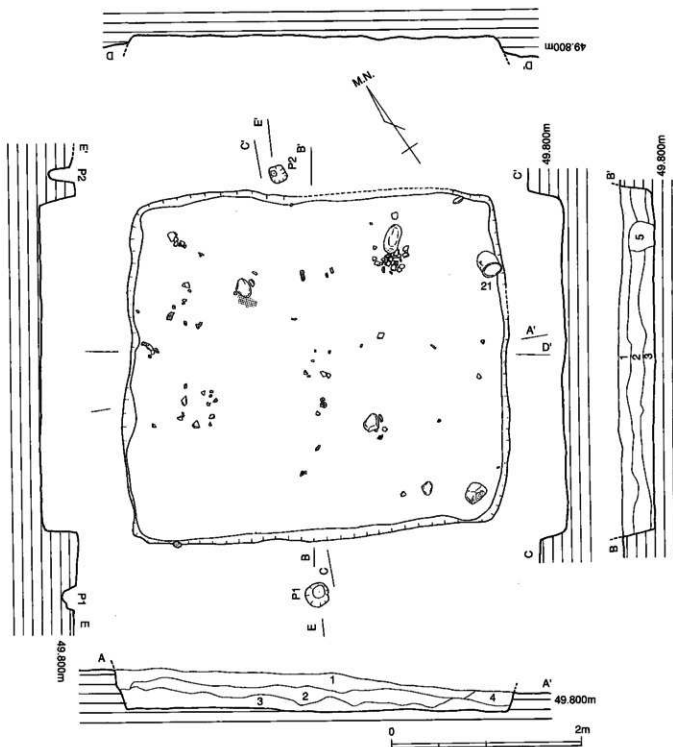
古墳時代から古代にかけての遺構は、竪穴住居跡が6軒検出された(SA1~SA6)が、掘立柱建物跡は確認されなかった。住居跡はその埋土と地山堆積層との判別に困難をきたした。検出された6軒の住居跡はいずれも単独で切り合っていない。おおむね住居跡同士の間隔が2~4mで標高50~51mの所に集中している。A区西側にはA区よりも広い残地となっている。出土した遺物の量などから推測すると、遺跡の本体がこの残地にある可能性が高い。なお、A区南側は湧水があり激しい浸食による崩落が原因と思われる急崖となっている。検出した住居跡以外にも住居跡が存在した可能性も否めない。住居跡は、A区東側よりSA1、SA2・・・SA6というように便宜上、遺構番号を付けた。

(1) SA4

a. 遺構(第11図)

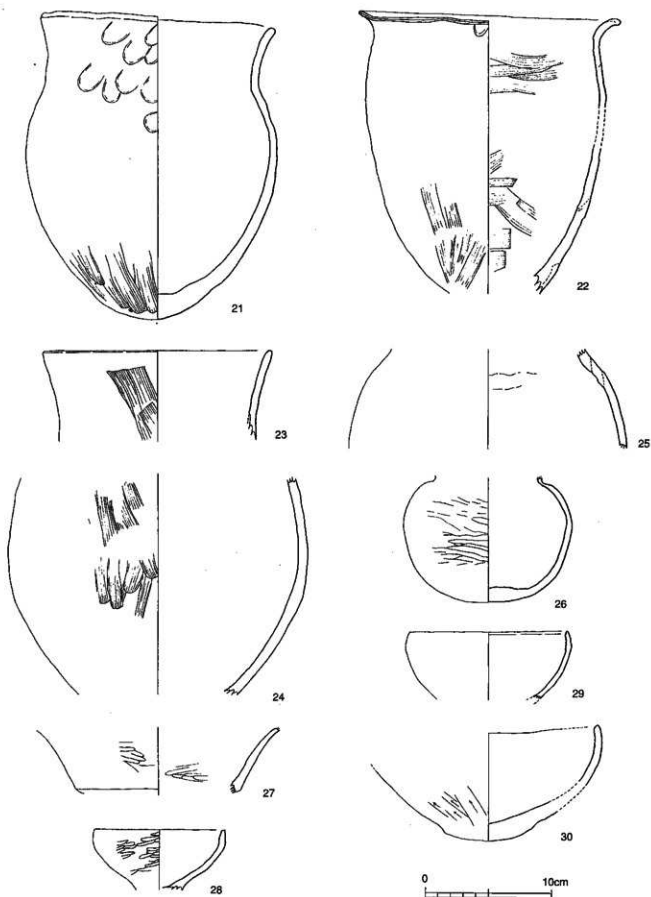
SA4は、SA2とSA6との間でC15グリッドの南側に位置し、SA6の南西方向約4mのところにある。主軸はN55°Wで最大長3m70cm、最大幅3m60cmの床面規模を有したほぼ正方形の竪穴住居跡である。壁高はよく残っているところでは40cm程度あり、床面はほぼ平坦である。住居内の大礫の周りやその下から炭化物を検出した。実測後柱穴を検出すべく床面の掘り下げを行ったが、柱穴は住居プラン内からは検出されなかった。プランの周囲で5個のピットを検出した。そのうちの南北方向の2個が、4号住居跡に伴うピット(外柱?)ではないかと考えられる。P1は最大径26cm×最小径24cmで深さ17.08cm、P2は20cm×16cmで深さ23.76cmである。

遺物は、完形の甕を含めて床面から115点出土している。



- 1…褐色土 (Hue 10YR4/4) しまりはやや固い。径5mm以下の炭化物粒を全体に含む。明瞭のまだら模様を示す。
- 2…暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまりはやや弱い。径3mm以下の炭化物粒を全体にまだらに含む。
- 3…黒褐色土 (Hue 10YR3/2) ややしまっている。径5mm以下の炭化物粒を全体にやや多く含む。明瞭のまだら模様をわずかに示す。
- 4…暗褐色土 (Hue 10YR3/3) しまりはやや弱い。径1mm以下のアカホヤ粒を含む。
- 5…黒褐色土 (Hue 10YR3/2) ややしまっている炭化物粒を含まない。

第11図 倉岡第2遺跡A区SA4遺構実測図 (1/40)



第12图 倉岡第2遺跡A区SA4出土遺物実測図 (S=1/3)

b. 遺物 (第12図)

甕 (21~24)

21は完形の甕で、住居の北東部の壁沿いで検出した。全体に歪な器形であり頸部の稜があいまいである。最大径は胴部上位にあり、底部は厚手の丸底である。風化しているが口縁から頸部にかけて指頭痕が見られ、器面調整はハケ目が見られる。外面の口縁部から胴部にかけてススが附着している。口径17.9cm、器高23.85cm。22は底部は欠損しているがほぼ完形の甕で、歪な器形である。口縁部は短く外反し、胴部はあまり張らない。口縁部に指頭痕が見られ、器面調整は板状の工具によると思われるハケ目が見られる。外面全体にススが附着している。23は口縁部で、直口気味にやや開く。外面は風化しているが調整にハケ目が見られる。24は胴部で、外面の調整はハケ目が見られる。また、外面底部付近にはススが附着している。

壺 (25, 26)

25は胴部で、胴部上位の内面に約1cmほどの間隔で粘土の接合痕が残る。調整はナデである。外面にスス附着が見られる。26は小形の壺で、器面調整は内面がナデ、外面はていねいなミガキが見られる。底部は厚みがある。推定底径3.2cm。

高坏 (27, 28)

27は高坏の坏部で、坏底部径13.1cm。口縁部はやや外反気味で、しっかりとした稜をもつ。器面調整は内・外面共にミガキが見られる。28は高坏の杯部で、器面調整は風化しているが内面にナデ、外面にミガキが見られる。推定口径10cm。

坏 (29, 30)

29は全体的に風化しているがナデによる調整が見られる。推定口径12.3cm。30の口縁部は内湾する。外面はヘラ状工具と思われる縦方向の荒いケズリ風のカキアゲが見られる。底部は成形が粗雑で、すわりが悪く、ススが附着している。底径6.9cm。

(2) SA 6

a. 遺構 (第13図)

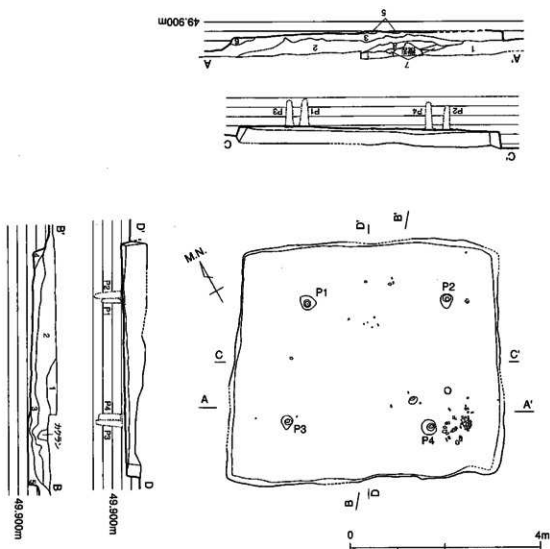
SA 6は、A区の最西端のB15グリッドに位置し、検出された住居跡の中でも最もよく残っており、主軸はN62°Wで最大径長5m50cm、最大幅4m70cmの床面規模を有した方形竪穴住居跡である。壁高は良く残っているところで50cm程度あり、床面はほぼ平坦をなしている。柱穴は住居プランのほぼ対角線上に4基検出され、柱穴間は3m15cmから3m85cm程度で方形に結ばれる。P1は最大径34cm×最小径30cmで深さ56.45cm、P2は29cm×26cmで深さ55.44cm、P3は30cm×24cmで深さ49.20cm、P4は34cm×30cmで深さ57.97cmである。壁帯溝や貼り床は確認されなかった。遺物は、住居の南東部に集中が見られ約70点が床面から出土している。

b. 遺物 (第14図)

甕 (31, 32)

31は、口縁内部がやや肥厚し、口唇部は短く外反し、先細りとなる。最大径は胴部上位にあるが胴部はあまり張り出さず、頸部との稜がはっきりしない。口縁から胴部にかけてススが附着してい

- 1…褐色土 (Hue 10YR4/4) まだらで、しまりがありややかたい。径2～3mm大の砂岩岩片を全体に含む。径5mm大の炭化物が点在する。
- 2…暗褐色土 (Hue 10YR3/3) まだらで、しまりがある。径5mm大の砂岩岩片を少量含む径2～5mm大の炭化物が点在する。
- 3…黒褐色土 (Hue 10YR2/2) ややしまった均質細粒土。径2～5mm大の炭化物を全体に含む。
- 4…黒褐色土 (Hue 10YR3/2) アカホヤブロック (径1cm以下) を全体に含み、やしまっている。径1mm以下の炭化物粒が点在する。
- 5…黒褐色土 (Hue 10YR3/2) 黒褐色でかたい径1～3mm大の円形あるいは楕円形のブロックを含む。しまりは強く、径1mm以下のアカホヤ粒が点在する。炭化物を含まない。
- 6…黒褐色土 (Hue 10YR2/2) しまりは強く、径1mm以下のアカホヤ粒と炭化物粒を全体に含む。
- 7…黒褐色土 (Hue 10YR3/2) ややしまっている。径1～3mm大の炭化物粒が全体に点在する。
- 8…黒褐色土 (Hue 10YR2/2) ややしまっている。径1～5mm大の炭化物粒を全体に多く含む。径2mm大の円礫を少量含む。



第13図 倉岡第2遺跡A区SA6遺構実測図 (1/80)

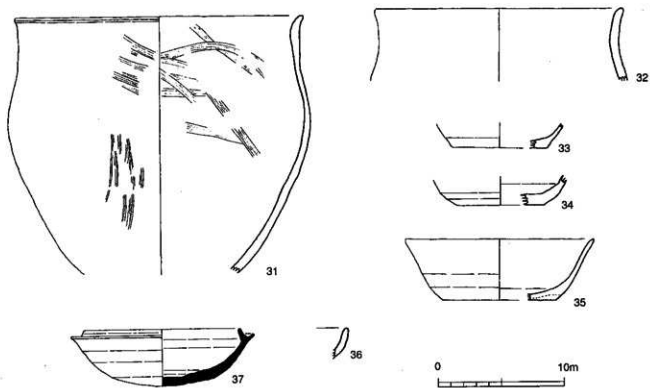
る。器面調整は幅の狭いヘラ状工具と思われるハケ目が見られる。32は、口縁部でゆるやかに外反するが、頸部の稜ははっきりしない。ナデ調整である。

坏 (33-36)

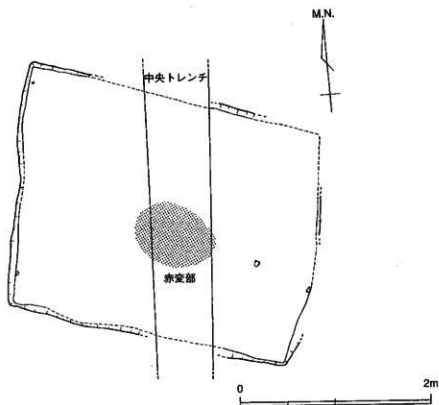
33・34・35は住居の覆土で第Ⅲ層から出土した。33・34は底部である。35は、ナデ調整が見られるが全体に風化が著しい。推定口径14.8cm、底径9.0cm。36は口縁部である。

須恵器 (37)

37は住居の覆土で第Ⅳ層から出土した完形の須恵器坏身で、口径は12.2cm、器高4.6cmである。底部は風化しており調整は不明である。



第14図 倉岡第2遺跡A区SA6出土遺物実測図 (S=1/3)



第15図 倉岡第2遺跡A区SA2遺構実測図 (1/40)

(3) SA 2

a. 遺構 (第15図)

SA 2は、A区のほぼ中央部のD15・16グリッドで、SA 4の東約4mのところに位置する。土層観察用のトレンチを掘り下げる際に住居プランを縦断したらしく、掘り下げの時に土器の集中が確認された箇所を残してSA 2の中央部付近を失った。床面と思われる面のほぼ中央で最大径93cm×最小径64cmの赤変部(焼土)を検出した。グリッド杭がSA 2の西側のすぐ近くにあり、杭の周囲に残した土層やC-Dの断面図からSA 2の西壁の高さが約15cmはあることがわかった。復元した全体の平面形は、主軸はN74°Wで最大長推定3m20cm、最大幅推定2m50cmの床面規模を有した方形竪穴住居跡と推定される。柱穴が存在したかどうかは不明である。また、遺物は、土器の集中部を中心に約45点出土した。

b. 遺物 (第16図)

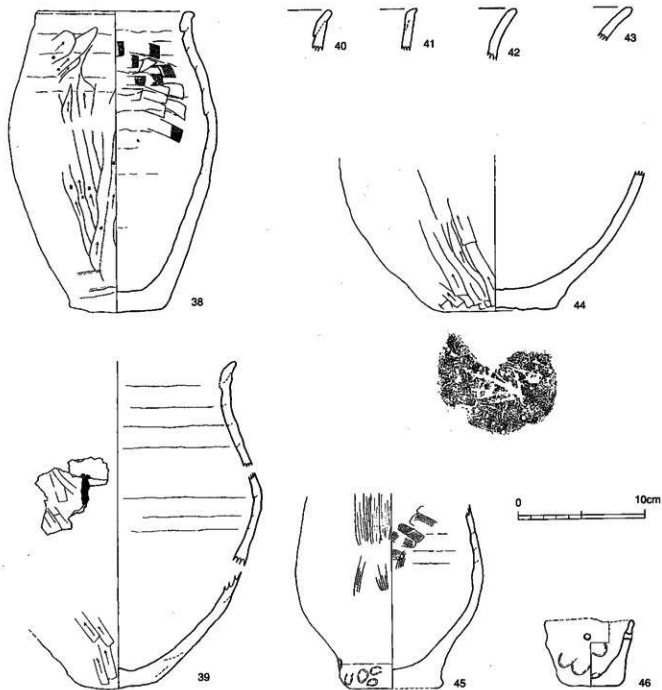
甕 (38~45)

38は、口縁部はとても短く外反し、頸部の稜があいまいではっきりしない。器面調整は外面が荒いケズリ気味のカキアゲ、内面にハケ目が見られる。内面には粘土の接合痕を残している。外面の口縁から胴部にかけて部分的にスス付着が見られる。最大径は胴部中位にあり、底部は平底である。口径11.6cm、底径7.4cm、器高23.9cm。39は、胴部に墨と思われる痕跡がみられる。口縁部は短く外反し、頸部の稜がはっきりしない。器面調整は内・外面共にナデであるが、外面底部付近にカキアゲ、内面には粘土の接合痕をはっきりと残す。40・41・42・43は甕の口縁部で、40・41には断面に粘土の接合痕がみられる。44は甕の底部付近で、ヘラ状の工具によるカキアゲが見られ、底部に

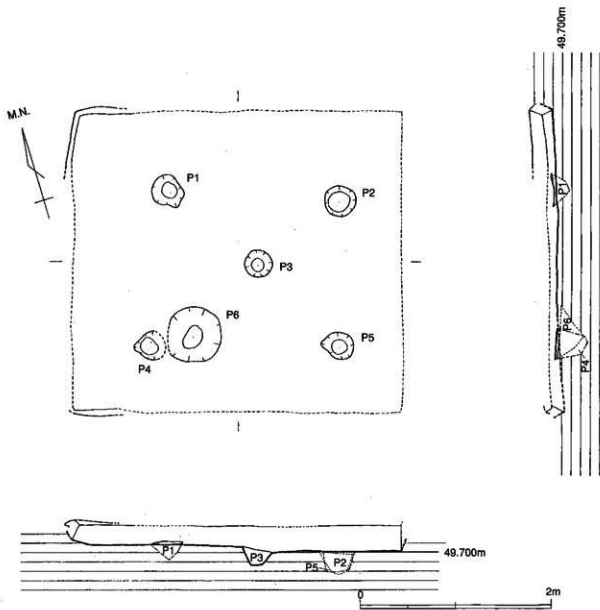
は木の葉底が見られる。外面の一部にスス付着が見られる。推定底径9.5cm。45は甕で、器面調整は外面はハケ目、底部外面に指押さえの調整が見られる。内面は指ナデ、粘土の接合痕を残す。また、底部は剥離が著しい。底径8.2cm。

その他 (46)

46はミニチュア土器で、手捏ね成形。向かい合って一対の穿孔がある。



第16図 倉岡第2遺跡A区SA2出土遺物実測図・拓影 (S=1/3)

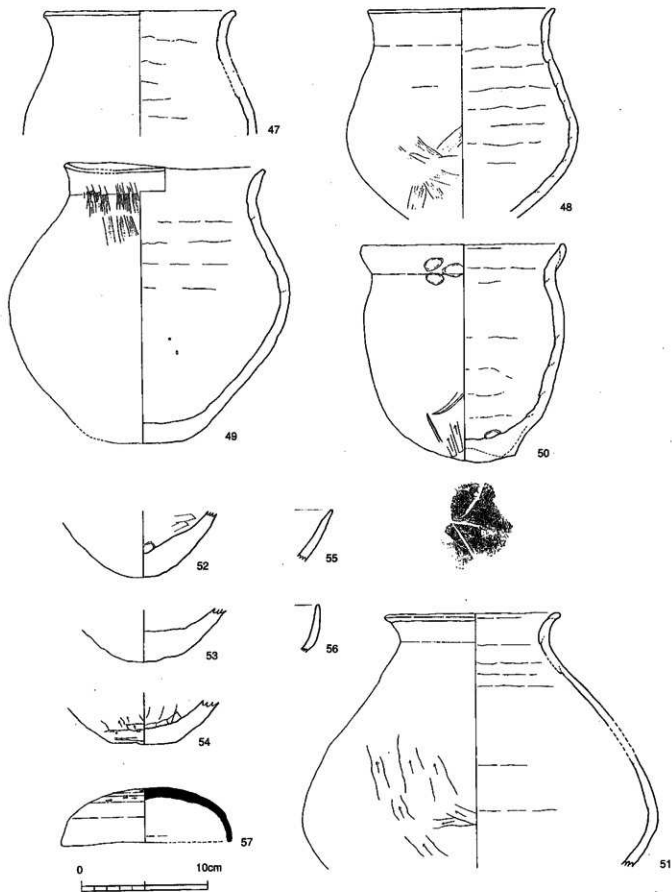


第17図 倉岡第2遺跡A区SA3遺構実測図 (1/40)

(4) SA3

a. 遺構 (第17図)

SA3は、A区のほぼ中央部で、SA2とSA4の北側でC15・D15グリッド、SA4の北東約1.5mに位置する。復元した全体の平面形は主軸はN76°Wと思われ最大長推定3m50cm、最大幅推定3m20cmの床面規模を有した方形竪穴住居跡と推定される。地山堆積層と住居の埋土との区別が付きにくく、検出時の埋土は1層で径2～3mm大の炭化物粒をまばらに含んだしまりの弱いぶい黄褐色土であった。住居プラン内にピットが6基検出された。P1は最大径38cm×最小径32cmで深さ18.38cm、P2は33cm×32cmで深さ22.44cm、P3は30cm×28cmで深さ19.54cm、P4は34cm×30cmで深さ33.38cm、P5は36cm×27cmで深さ21.55cm、P6は62cm×58cmで深さ23.77cmである。



第18图 倉岡第2遺跡A区SA3出土遺物実測図・拓影 (S=1/3)

P 6は他のピットより大きく、またP 3は住居の中心にあり、いずれも柱穴とは考えにくい。遺物は、床面と思われる高さより、34点出土した。

b. 遺物 (第18図)

甕 (47~50)

47は、ナデ調整が主で、内面に粘土の接合痕を残す。口縁部は短く外反し、頸部の稜はあいまいである。外面にスス付着が見られる。口径14.7cm。48は、口縁部は短く外反し、口唇部は先細りとなる。頸部の稜はあいまいで最大径は胴部中位から下位にある。ナデ調整が主であるが、外面にハケ目が見られ、内面には粘土の接合痕を残す。胴部の一部にスス付着が見られる。推定口径14.7cm。49は、口縁部は短く外反する。器形が空であり、最大径は胴部中位から下位にある。底部は平底である。器面調整は荒く、ハケ目を横ナデで消している。内面には粘土の接合痕を残す。口径15.6cm、底径7.6cm、器高21.9cm。50は口縁部は短く外反し、口唇部は内傾気味である。器面調整は荒く、ナデが主であるが、底部付近はカキアゲ、外面頸部付近には指押さえによる調整が見られ、内面には粘土の接合痕を残す。底部は重ですわりが悪く、底部や底部付近に工具?によるはっきりした線刻が見られる。推定口径15.9cm、底径7.4cm。

壺 (51)

51は、器面調整は外面がていねいなナデ調整でカキアゲが見られる、内部は粗く、粘土の接合痕を残す。口縁部は短く外反し、最大径は胴部下位にある。口径13.5cm。

底部 (52~54)

52は甕の底部で、丸底で内面の中央に指頭圧痕、一部にハケ目が見られる。53は甕の底部で、厚手の丸底である。内部は平底に近い。54は甕の底部で平底、器面調整は荒いが、外面にカキアゲが見られ、内面は指によるナデが見られる。

高坏 (55)

55は口縁部で、外に開き、端部が先細る。器面調整は風化著しいが内・外面共にミガキによる調整が見られる。

坏 (56)

56は口縁部で、器面調整は内・外面共にナデである。

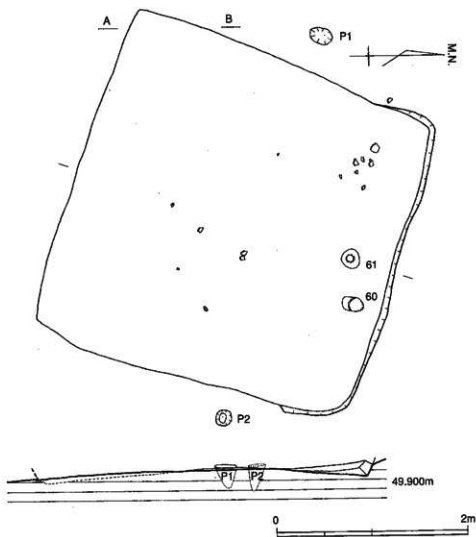
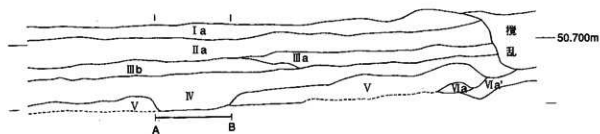
須恵器 (57)

57は須恵器坏蓋で、天井部の約1/2にヘラケズリがみられる。口径は13.25cm。

(5) SA 1

a. 遺構 (第19図)

SA 1は、D15グリッドの北側で、SA 3の北西約2mに位置する。南北3m50cm、東西3m50cmの床面規模を有した正方形の竪穴住居跡である。主軸は地形から考え、N18°Eと思われる。住居プランを確認できたのが床面近くであり、壁高は不明である。しかし、土層観察用に残したベルトにSA 1のプランの一部(南西部)が幸いにもかかっており、断面を観察すると少なくとも20cmは壁高があったことがわかる。床面はほぼ平坦である。北側半分が宮崎層群の砂岩岩盤、南半分が



- I a … 表土。にぶい黄褐色土 (Hue 10YR5/4) で、流れ込み堆積物と文明ボラおよびアカホヤ粒を混入する。ややしまったかたい砂質土。
- II a … にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) で、しまりのやや弱い砂質細粒土。全体に3mm以下の炭化物と細礫、スコリアを含む。
- III a … 黒褐色土 (Hue 10YR3/2) で、流れ込み堆積物とスコリアおよびアカホヤ粒を混入する。ややしまった黒褐色土 (Hue 10YR3/1) をブロック状 (不定形) に含み、まだら模様を示す。炭化物を少量含み、全体がややしまっている。
- III b … 黒褐色土 (Hue 10YR3/1) で、流れ込み堆積物と文明ボラ、スコリアおよびアカホヤ粒を混入。ややしまった土中に黒褐色土 (Hue 10YR3/2) をまだら状に含む砂質土。炭化物は含まない。インターフィンガー (指間) 堆積をしている。
- IV … 暗褐色土 (Hue 10YR3/3) で、さらさらしており、ややしまりの弱い均質細粒土。
- V … 黒褐色土 (Hue 10YR2/2) で、さらさらしており、ややしまりの弱い細粒土。径5mm以下の炭化物を全体に含む。
- VI a … にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) で、橙色アカホヤを混入する。しまりがやや弱く、V層とVIb層の漸移層。
- VI a' … 黒色 (Hue 10YR2/1) で、本体はVIb層と連続する。かたくしまっている。

第19図 倉岡第2遺跡A区S A 1遺構実測図 (1/40)

アカホヤ層とアカホヤ混じりの黒褐色土から成り、貼り床が存在した可能性が高い。柱穴は住居プラン内からは検出されなかった。プラン外側の東西方向にピットが2基検出された。P 1は最大径25cm×最小径16cmで深さが19.02cm、P 2は20cm×16cmで深さ27.60cmを計る。SA 1に伴う柱穴(外柱?)の可能性が考えられる。出土した遺物は、床面で約20点出土している。土器および土器片は住居内の北側に見られた。

b. 遺物 (第20図)

甕 (58~61)

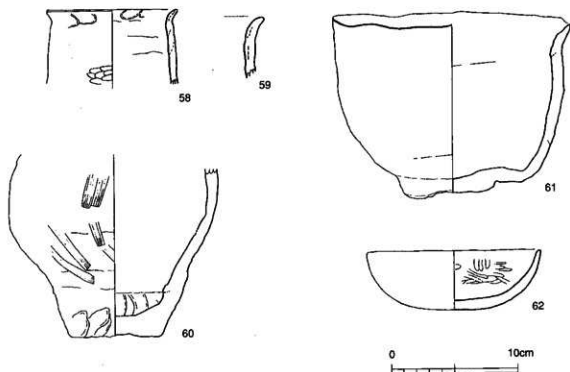
58は、口縁部が短く外反する。胴部はあまり張らないようである。ナア・指押さえによる調整が主であるが、一部ミガキも見られる。内面に粘土の接合痕を残す。全体的に風化している。推定口径10cm。59は、甕の口縁部でナア調整。断面に粘土の接合痕が見られる。傾きは不明である。60は、甕の胴部以下と思われる。全体的に荒いナア調整である。内面の底部に指によるナア、外面はハケ目、底部付近に指頭痕が見られる。底部は平底である。底部付近の一部にスス付着が見られる。底径7.1cm。

鉢 (61)

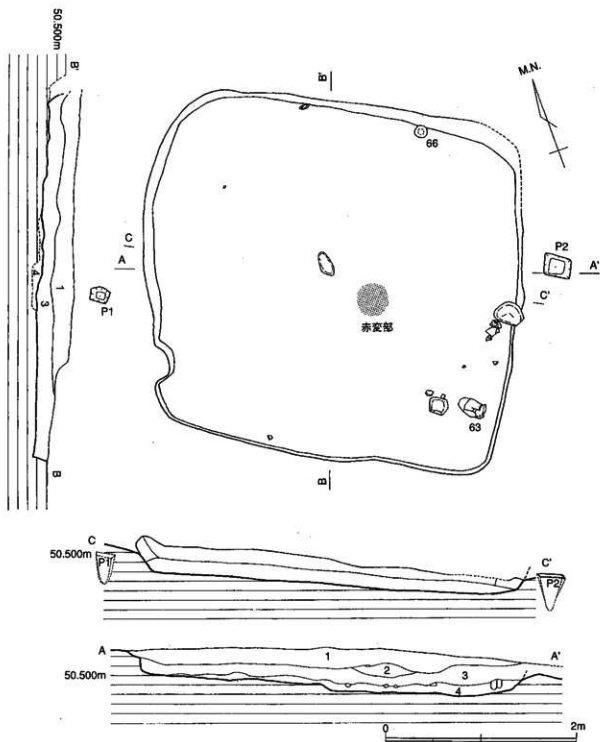
61は、完形の鉢でとても歪であり、注口が見られる。荒いナア調整で内面と外面の一部に粘土の接合痕を残す。底部はやや上げ底気味で歪だが平底である。口径17.9cm、底径8.0cm。63は、鉢の底部で、内面に工具によるナア調整が見られる。

坏 (62)

62は、風化著しいが内面にミガキが見られる。口径13.6cm。

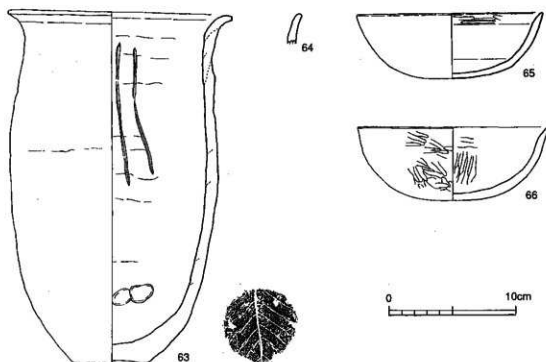


第20図 倉岡第2遺跡A区SA 1出土遺物実測図 (S=1/3)



- 1…褐色土 (Hue 10YR4/4) しまってややかたい。径5mm以上の砂岩岩片と径2~3mm大の炭化物粒を全体に含む。
- 2…黒褐色土 (Hue 10YR3/2) しまりはやや弱い。径5mm~1cm大の炭化物粒を全体に大量に含む。レンズ状に堆積する。
- 3…褐色土 (Hue 10YR4/4) 1よりはしまりは弱い。径5mm~1cm大の円または楕円の明確のまだら模様を示す。部分的にアカホヤの小ブロックや粒子を含む。
- 4…にぶい黄褐色土 (Hue 10YR4/3) 径5cm大のアカホヤブロック、径1cm以下の炭化物粒、径2~3cm大の黒色でかたい土のブロックを混入し、住居の床面を形成している。

第21図 倉岡第2遺跡A区SA5遺構実測図 (1/40)



第22図 倉岡第2遺跡A区SA5出土遺物実測図・拓影 (S=1/3)

(6) SA5

a. 遺構 (第21図)

SA5は、SA4とSA6の北側にC14・15グリッドに位置し、SA6から北東約1mのところにある。主軸はN26°Eと思われ、最大長3m50cm、最大幅3m30cmの床面規模を有した方形竪穴住居跡である。壁高は良く残っているところで20cm程度である。床面はほぼ平坦である。床面ほぼ中央部に焼土と思われるうすい赤変部が見られた。柱穴は住居プランの中には検出されなかったが、プラン外側の東西方向にピットが2基検出された。この2基は方形のピットであり、P1は最大径22cm×最小径16cmで深さ30.73cm、P2は38cm×22cmで深さ36.86cmである。ピットの埋土は褐色(Hue10YR 4/6)の細粒土で、しまりは弱く、さらさらしていた。第IV層と極めて似ており、SA5に伴う時期のものと思われ、SA5の外柱の可能性も考えられる。遺物は少なく約10点ほどであるが、完形甕などが床面から出土している。

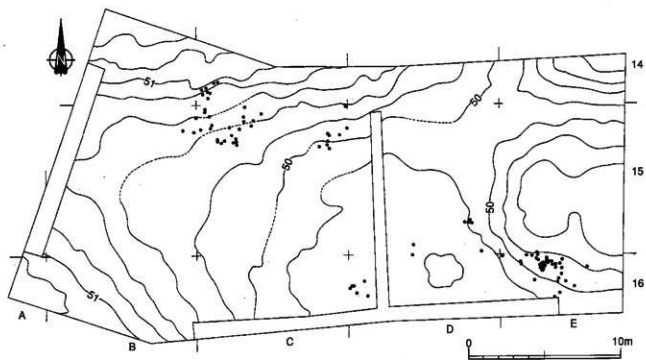
b. 遺物 (第22図)

甕 (63, 64)

63は完形の甕で、口縁部は短く外反し、胴部は張らずに長胴となる。底部は木の葉底である。調整は指による縦ナア、指押さえであり、内面に粘土の接合痕が残り、3本の工具痕が見られる。64は口縁部である。傾きは不明である。

坏 (65, 66)

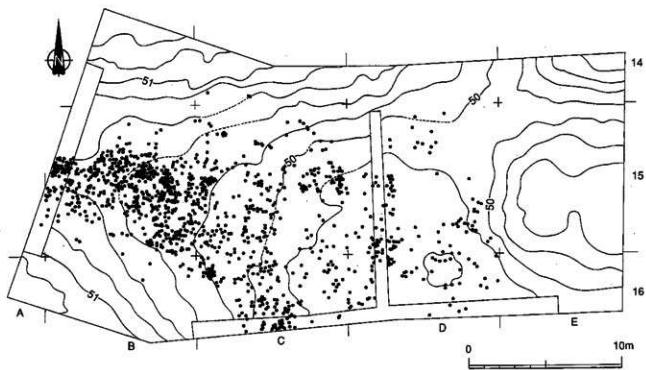
65は、ナア調整が主であるが、内面の口縁部にミガキがみられる。口径14.6cm、底径7.2cm。66は完形の坏で、ミガキが見られるが全体に風化している。最大口径15.0cm、最小口径14.3cm。



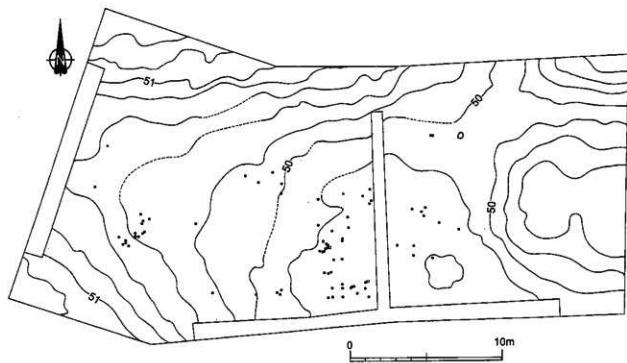
第23图 倉岡第2遺跡A区Ⅱ層遺物分布状況



第24图 倉岡第2遺跡A区Ⅲ層遺物分布状況



第25图 倉岡第2遺跡A区IV層遺物分布状況



第26图 倉岡第2遺跡A区V層遺物分布状況

3 包含層出土の遺物 (第27図～第44図)

A区の遺構外の遺物は、第Ⅱ層から第Ⅴ層までの各層で出土した。遺物の出土状況を見ると第Ⅳ層がそのピークである。(第23図～第26図参照)第Ⅴ層は縄文時代後期の遺物包含層である。前述したとおりである。第Ⅲ層から第Ⅳ層は古墳時代後期から古代にかけての遺物包含層である。第Ⅱ層からは極わずかな量の土器が出土した。第Ⅱ層から第Ⅲ層の出土状況を見ると、A区西側の調査区外から調査区方向へ流れ込み堆積したように見受けられる。よって、各層ごとではなく、各時代ごとに遺物を扱うことにする。

(1) 古墳時代の遺物 (第27図～第31図)

甕 (第27図 67～73、第28図74)

67は、完形の甕で内面に粘土の接合痕を残す。口径がいびつで、外面の口縁部から頸部と内面の一部分に指頭痕を残す。68は、口縁から胴部で口縁部に指頭痕が見られる。69は、口縁部で直行する。70は、69の底部でわずかに上げ底である。71は、胴部から底部で外面と内面の底部付近に指ナデと指頭痕が見られる。底部は木の葉底である。72は、ほぼ完形の甕で、調整はハケ目が見られる。内面に粘土の接合痕を残す。口縁が短く外反し、底部は平底である。73は、口縁から底部で、内・外面にハケ目が見られる。底部は木の葉底である。74は、口縁から底部付近である。口縁は短く外反する。外面にタタキが見られる。

底部 (第28図 75～85)

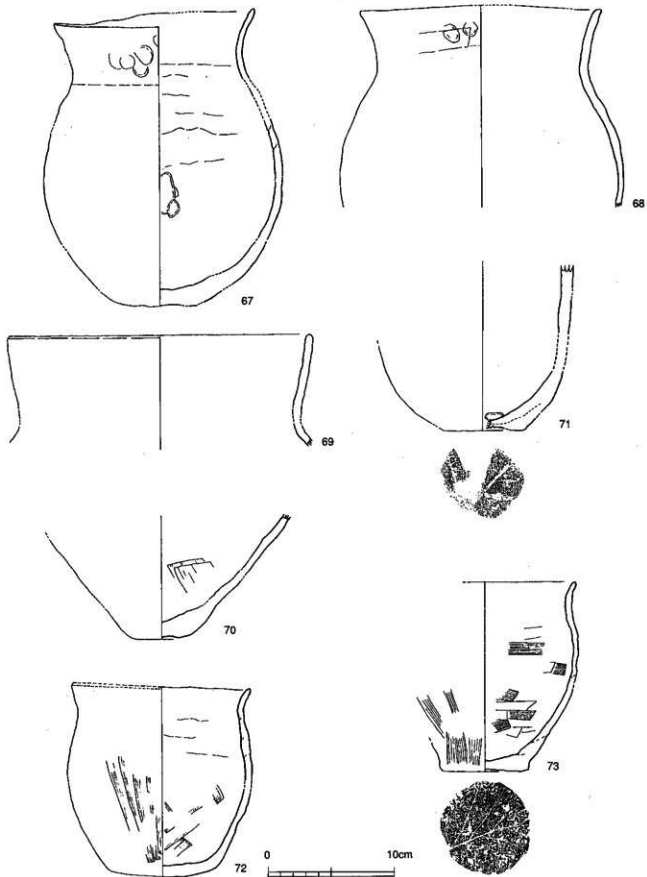
75・76は、丸底で内面に指頭痕が見られる。77・78・79は、丸底である。80は、丸底でレンズ状に厚い。81は、平底で中央部は指頭によると思われる凹状のくぼみが見られる。82は、尖底気味で、中央部に凹状のくぼみが見られる。83・84・85は、平底であり、木の葉底が見られる。83は内面に指頭痕が見られる。84は底部を貼り付けた粘土の接合痕が見られる。

壺 (第28図 86)

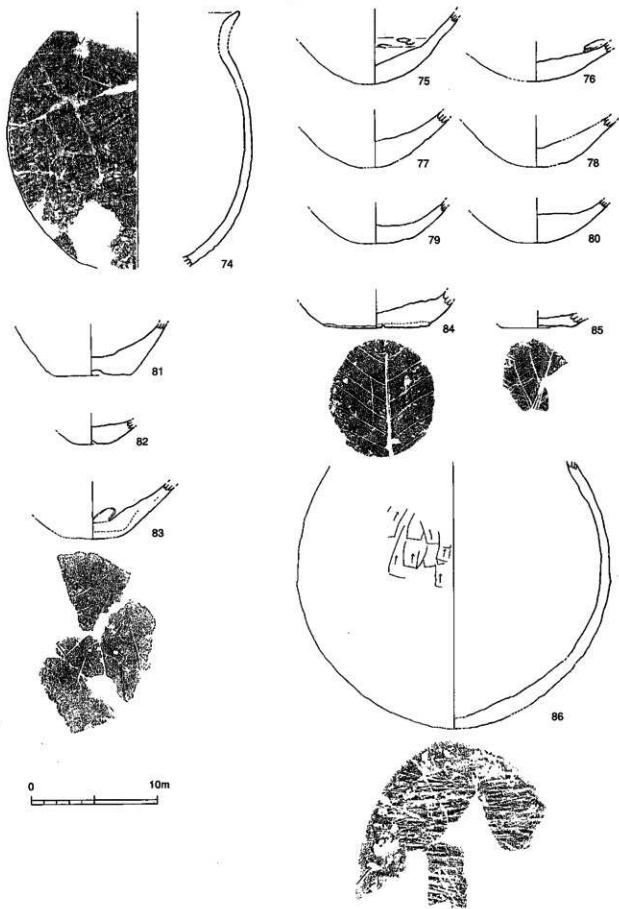
86は、壺の胴部から底部である。外面に工具による縦方向のカキアゲが見られ、底部にはタタキが残る。

高坏 (第29図 87～95)

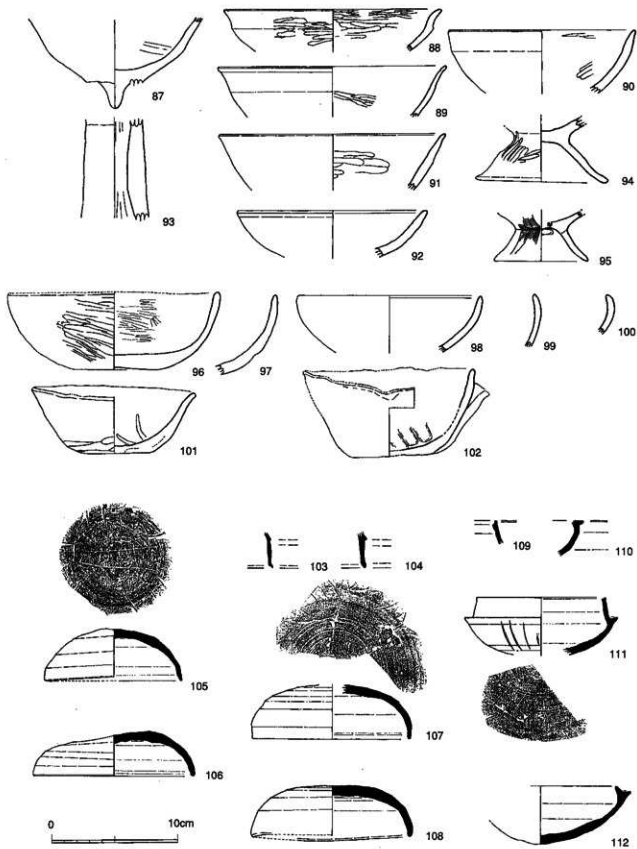
87は、坏部である。88は、坏部で口縁部は短く外反し、稜をもつ。89は、坏部で口縁部はわずかに外反し、稜は不明瞭である。90は、坏部で口縁は直行し、口唇部はわずかに外反する。稜は不明瞭である。91は、坏部で口縁は直行気味に開く。92は、坏部で内傾気味に浅く開く。93は、脚部である。94・95は、裾部で坏部より「ハ」の字に開く。



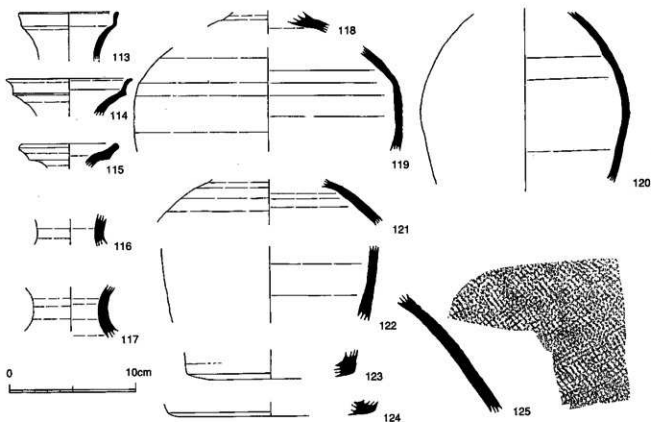
第27图 盒内第2道跡A区包含層出土遺物実測図(1)(S=1/3)



第28图 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(2)(S=1/3)



第29图 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(3)(S=1/3)



第30図 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(4)(S=1/3)

坏(第29図 96~102)

96は、完形の坏で内・外面共にミガキが見られる。97は、口縁から底部付近である。98・99・100は口縁部である。101は、完形の坏で、口縁部は外反し、底部付近にケズリ、内面に工具痕が見られる。102は、完形の坏で、口縁部に注口がある。

須恵器(第29図 103~112、第30図)

坏蓋(第29図 103~108)

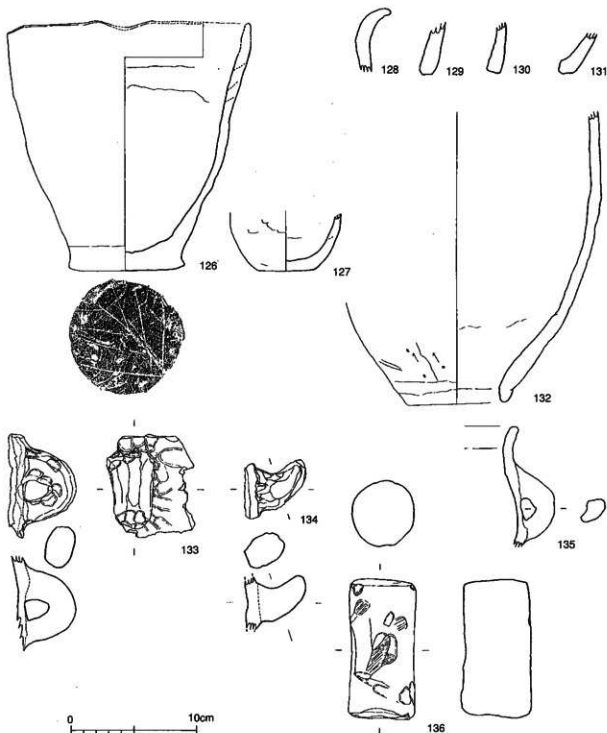
103は口縁部で、端部は内傾する凹面となっている。104は口縁部で、端部はやや丸みを帯びている。105は外面は荒いナデであり、稜がはっきりしない。天井部に窯印と思われる2条の線刻が見られる。口径は8.8cmである。106は天井部が歪である。口径は12.6cmである。107は天井部に窯印と思われる1条の線刻が見られる。口径は12.4cmである。108は口縁部が歪である。口径は12.4cmである。

坏身(第29図 109~112)

109は受け部の立ち上がりで、口縁端部は内傾する凹面となっている。110は底部部で、立ち上がりを欠いている。受け部は垂直にのびる。111は口縁端部は内傾する凹面となっており、受け部は上外方にのびる。底部部には窯印と思われる4条?の線刻が見られる。112は風化が激しい。立ち上がりは短く内傾し、受け部はやや上外方にのびる。

壺 (第30図 113~125)

113~115は口縁部が屈曲する壺の口縁部である。113は、屈曲した口縁部が外反しながら短く直立気味に立ち上がり口唇部は丸い。114・115は屈曲した口縁部が外反しながら外方に立ち上がる。114の口唇部は尖り、大きく外反する。115は口唇部は平坦である。116・117は頸部である。118は頸部付近である。119・121は頸部から胴部である。120・122は胴部である。120は体部に丸みを持つ。123・124は底部である。胴部は大きめの底部から鋭角的に立ち上がるものと思われる。125は胴部であり、外面に格子目タタキが見られる。



第31図 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(5)(S=1/3)

その他(第31図 126~136)

126は、深鉢で、口縁部に注口が見られる。粘土の接合痕を残し、底部は木の葉底である。127は、小型の土器で粘土の接合痕を一部に残す。128は、甔の口縁部で外反する。129から131は、甔の底部である。132は、甔の胴部から底部で一部にカキアゲが見られる。単孔である。133・134は把手、135は、甔の口縁部と把手である。136は、支脚である。

(2) 古代の遺物(第32図~第36図)

甕(第32図 137~146、第33図 147~149)

137は口縁部から胴部で、口縁部は短く外反する。内面に斜め方向にハケ目が見られる。138は口縁部で、やや肥厚し、大きく外反する。内面にケズリが見られ、全体的に風化している。139は口縁部から胴部で、頸部がやや肥厚する。口縁は直行気味に外反する。外面はナデ、内面はケズリの後、ナデ調整である。140は口縁部から胴部で、口縁は「く」の字に外反する。胴部は丸みを持つ。内面の調整はケズリの後、ナデ調整である。141は口縁部から胴部で、口縁は直線的に開く。内面の調整はケズリで部分的に指ナデが見られる。142は口縁部から胴部で、口縁は短く、直線的に開く。内面の調整はケズリである。143は口縁部から胴部で厚みがあり、口縁は外反し、口唇部は丸みを持つ。風化しているが外面に縦方向の後横方向のハケ目が見られる。144は口縁部で、先細り、「く」の字に外反する。145は口縁部から胴部で、大きく外反する。口唇部はやや平たい。146は口縁部から胴部で、口縁は中央がやや肥厚し、「く」の字に外反する。内面にケズリが見られる。147は口縁部で、大きく外反する。口唇部は丸みを持つ。内面にケズリが見られる。148は口縁部から胴部で、長胴である。口縁は歪である。内面にケズリが見られる。

その他(第33図 149~151)

149は深鉢で、口縁部から底部付近である。口縁は直行し、稜は不明瞭である。内外面に粘土の接合痕を残している。150は鍋である。口縁は直線的に開き、口唇部は肥厚し丸みを持つ。内面の調整はケズリである。外面には粘土のたまりが見られる。推定口径20.6cmである。151は壺である。口縁は内傾しながら外反する。内面の調整はケズリである。

坏(第34図)

A区出土遺物の中でも多くを占めるもので、形態には様々なものがみられる。ここでは底部の調整や口縁の形態によって以下のように大まかな分類を行う。

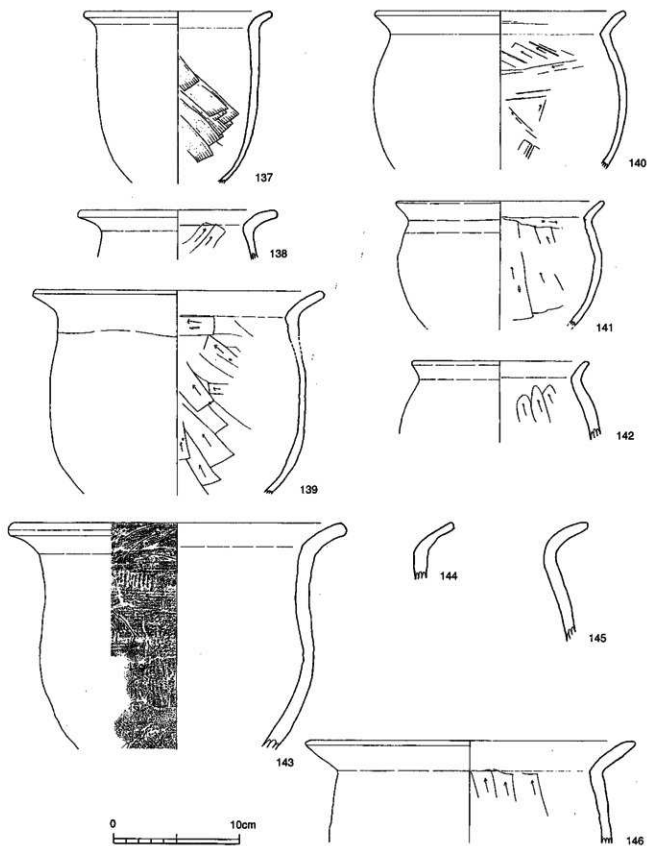
坏Ⅰ類 口径12cm~13.5cm程度で、器高が5cm前後と高いもの。

I-1 底部が回転ヘラ切りのもの(152)

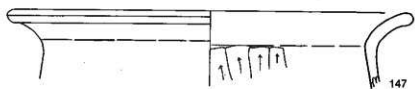
I-2 底部がヘラ切りのもの(153)

I-3 底部がナデ調整のもので口縁がやや外反するもの(154)

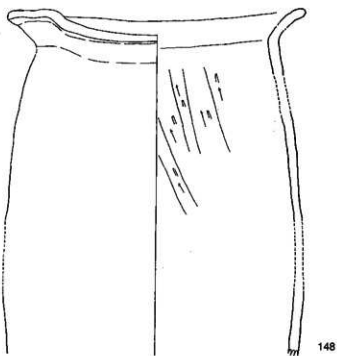
坏Ⅱ類 口径12cm~13.5cm程度で、器高が4cm~5cm弱のもの。



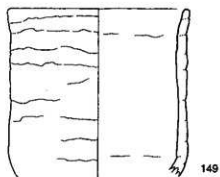
第32图 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(6)(S=1/3)



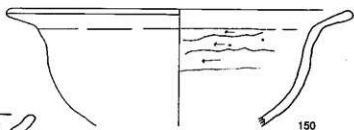
147



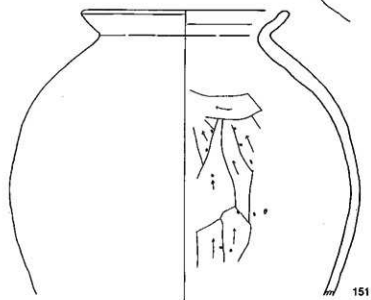
148



149



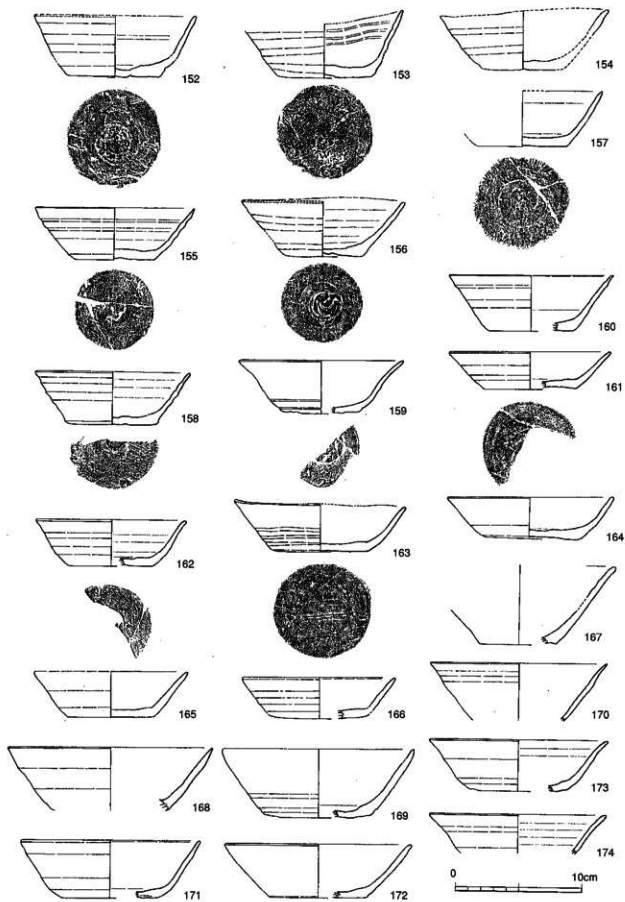
150



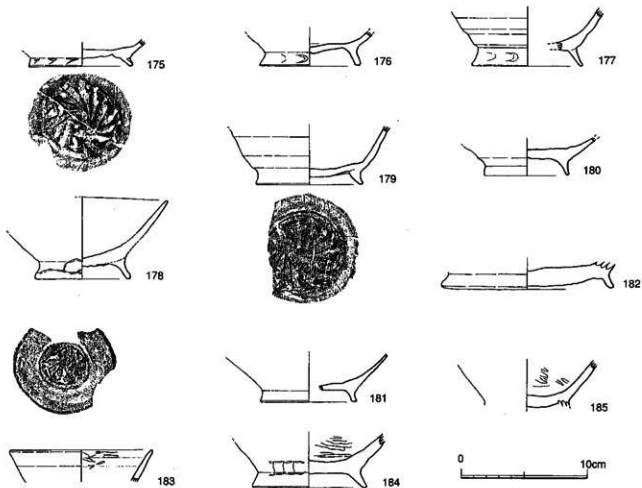
151



第33图 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(7)(S=1/3)



第34图 仓网第2遗址A区包含层出土器物实例图(8)(S=1/3)



第35図 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(9)(S=1/3)

Ⅱ-1 a 底部が回転ヘラ切りのもの (155、156、157、158)

Ⅱ-1 b 底部が回転ヘラ切りで口縁が外反するもの (159)

Ⅱ-2 底部がナデ調整のもの (160)

坏Ⅲ類 口径が12cm~13.5cm程度で、器高が4cm以下のもの。

Ⅲ-1 a 底部が回転ヘラ切りのもの (161)

Ⅲ-1 b 底部が回転ヘラ切りで口縁が外反するもの (162)

Ⅲ-2 底部がヘラ切り離しのもの (163、164)

Ⅲ-3 底部がナデ調整のもの (165、166)

坏Ⅳ類 口径が14cm以上で器高が5cm以上と高い(高いと思われる)もの。

Ⅳ-1 底部がナデ調整で口縁が外反ぎみのもの (167)

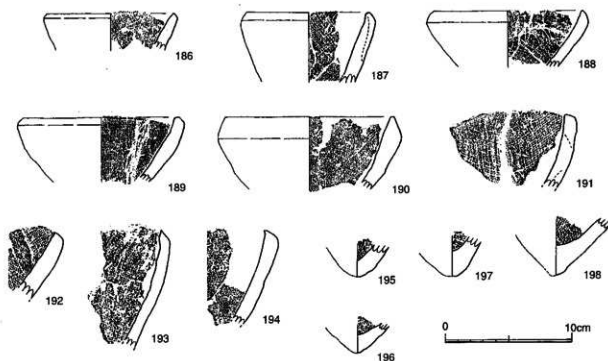
Ⅳ-2 a 底部調整不明のもの (168)

Ⅳ-2 b 底部調整は不明だが口縁が内傾ぎみのもの (169)

Ⅳ-2 c 底部調整は不明だが口縁が外反ぎみのもの (170)

坏Ⅴ類 口径が14cm以上で器高が5cm以下と低い(低いと思われる)もの

V-1 底部が回転ヘラ切りのもの (171)



第36図 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(10)(S=1/3)

V-2 a 底部がナデ調整のもの(172)

V-2 b 底部がナデ調整で口縁が外反するもの(173)

V-3 底部調整は不明だが口縁が外反するもの(174)

高台付坏(第35図 175~181)

175は高台外面に底部と接合した際にできた工具による刺突痕が明瞭に残る。底部は放射状の接合痕が見られる。176・177は高台外面に刺突痕が見られる。176の底部は風化しているが、放射状の接合痕が見られる。178は全体的に甕である。高台外面に指ナデの際の指頭痕が見られ、底部には放射状の接合痕が見られる。179の底部は、放射状に工具で押さえた後の指頭調整痕で見られる。180・181は内外面共にナデ調整である。

高台付皿(第35図 182)

182は高台付皿の底部と思われる。風化しているが、一部に放射状の指頭調整痕が見られる。

黒色土器 (第35図 183~185)

183は坏の口縁部である。器面調整は内面がミガキで外面はナデである。184・185は高台付坏の底部である。184は高台と底部の外面接合部に指押さえが見られる。調整は内面がミガキ、外面はナデである。185の調整は内面がミガキ外面はナデである。

布痕土器 (第36図 186~198)

製塩や焼塩、塩の運搬に使用された土器とみられ、円錐形の器形でやや内湾ぎみの胴部をもち、口唇部が尖る特徴がある。南九州東岸部では一般的な形態で「布痕土器」と呼称されている。内面に粗い布の圧痕、外面に指頭圧痕を残すものが多い。口径はやや小さいもの(186・187)と大きいもの(188・189・190)がある。口唇部の形態は同一個体においても部分ごとにかなりの差がみられる。口唇部の断面が三角形のものが基本とみられ、底部は尖底(195・196・197)が基本であり、乳房状に突出するもの(198)もみられる。また、全体的な形状には以下のようなものがみられる。

- 1 口径に対して器高が低いと思われるもの(188, 189)
- 2 口径と器高がほぼ等しいと思われるもの(190)
- 3 口径に対して器高が高いと思われるもの

192から194は口縁部から胴部である。

4 その他の遺構と遺物

(1) 遺構

SC1 (第37図)

遺構はA区の北東部に位置する。

検出面は第V層(アカホヤ層の上層)

である。長径約80cm深さ10cmの

円形の土坑で、覆土は黒色土

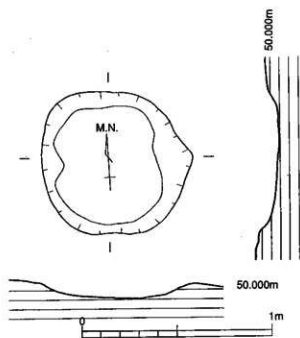
(Hue10YR 2/1)の1層で多くの炭化

物を含む。遺構の位置する場所は

小丘の裾部にあたり、周辺よりやや

高い。土器などの出土遺物はなく、

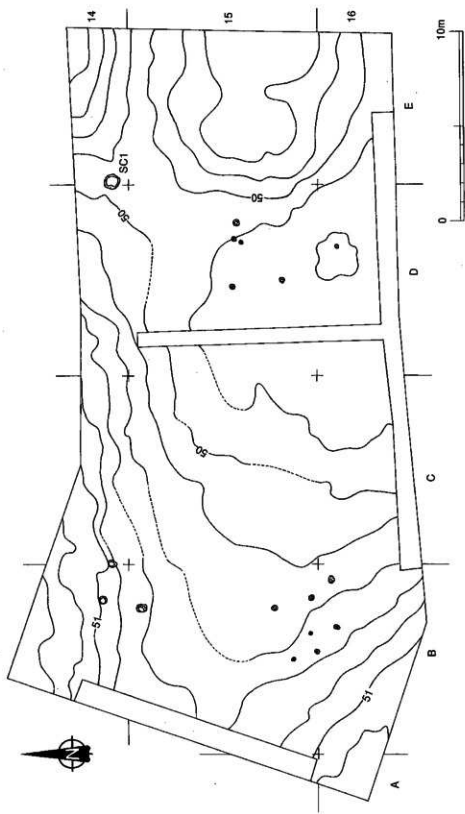
正確な構築時期は不明である。



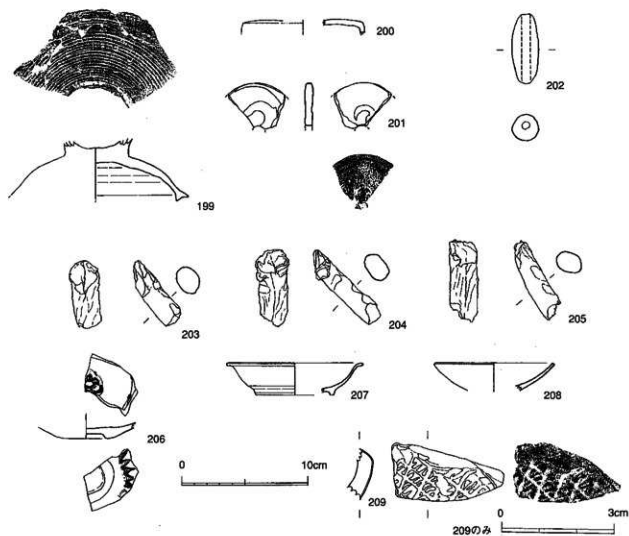
第37図 倉岡第2遺跡A区SC1実測図(1/20)

ビット群 (第38図)

ビット群は、遺構検出面である第VI層上面で、直径約30cm前後のビットをA区北西部から南東部にかけて多数検出した。特に北西側には一辺が約50cm×40cmの方形のビットが3基みられた。しかし、ビットは埋土の差がなく、また、うまく並ばないことなどからビット同士の伴同関係がつかみきれなかった。よって、ここではビット群の位置を図示するだけにとどめる。



第38図 倉田第2灌漑A区ヒット分布図

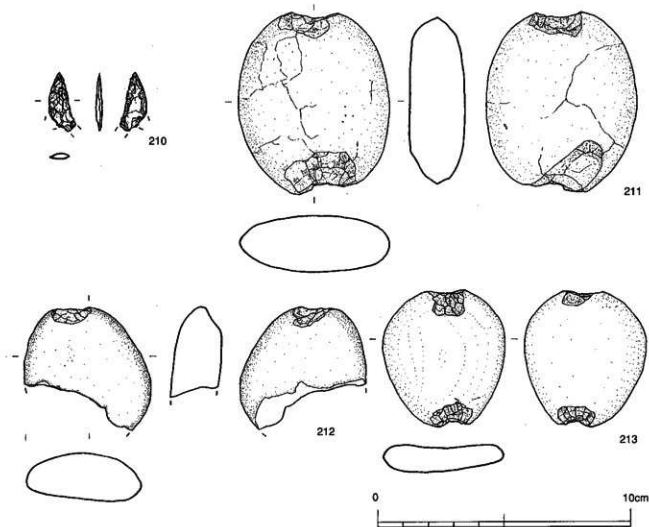


第39図 倉岡第2遺跡A区包含層出土遺物実測図(11)(S=1/3)

(2) 遺物

土器類・その他(第39図 199~209)

199は蓋で、外面にカキ目がある。200は蓋である。201は土師質土器底部を利用した紡錘車で、直径6.8cm、孔の直径約1.0cm、厚さ約0.7cmを計る。202は、有孔土錘で、ほぼ紡錘形をなし、全長約5.6cm、直径約2.2cm、孔の直径約0.7cmを計る。203~205は、器種不明である。粘土を丸い棒状に手捏ね成形し、土器本体に接合したものと見られる。206は表土から出土した陶磁器で底部で、碁笥底である。207は第Ⅲ層上面出土の白磁である。口縁が短く外反する。208は表土出土の白磁である。内外面に貫入が見られる。209は表土出土の陶磁器である。日本では交趾と呼ばれ、明時代の特色ある貿易陶磁器の一つと思われる。



第40図 倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(1)(S=2/3)

石器(第40図～第44図)

A区から出土した石器類は33点で、そのほとんどが第IV層からの出土である。内訳は石鏃1点、石錘6点、磨石3点、敲石1点、磨製石斧4点、砥石1点、台石7点、鋸齒状石器1点、石皿破片2点、剥片7点である。

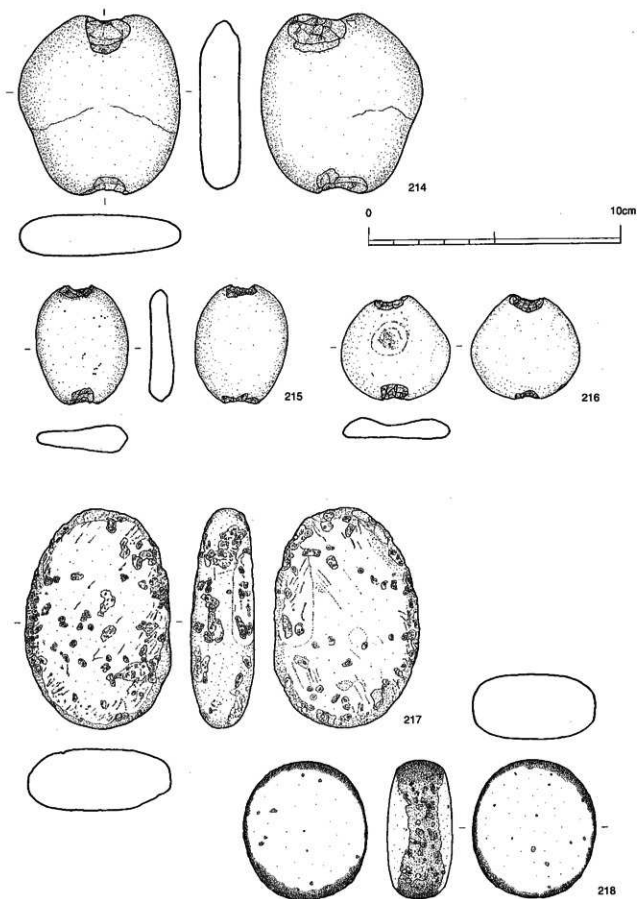
住居跡出土の石器(第40図)

住居跡出土の石器は石錘と台石である。SA2の床より石鏃が出土しているが、遺構検出面下層(第V層)の遺物の可能性が高い。

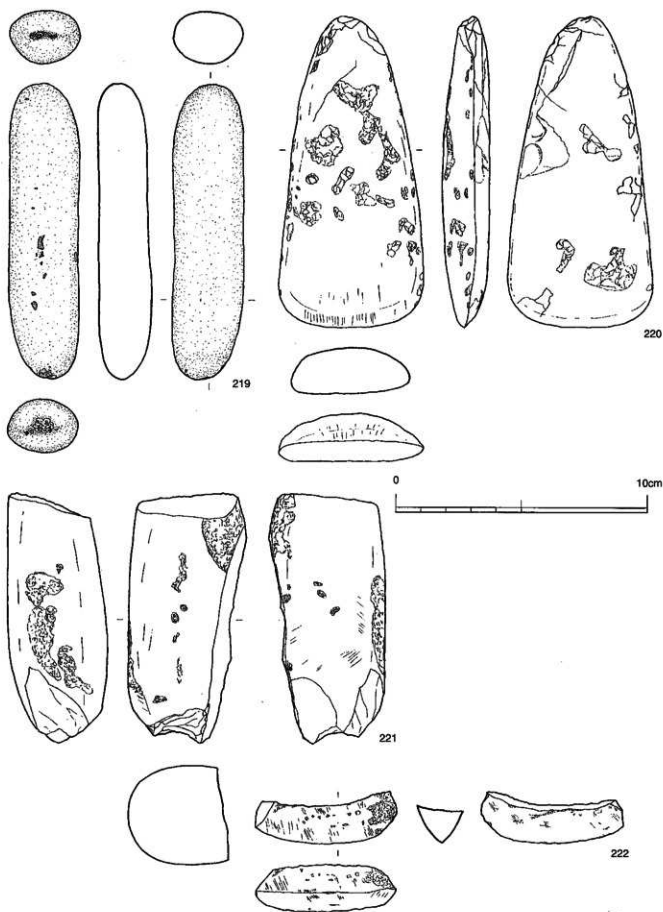
210は打製石鏃で、SA2の床から出土した。石材は頁岩である。211～213は打欠石錘で、211はSA3から、212はSA4から、213はSA6から出土した。いずれも石材は砂岩である。

包含層出土の石器(第41図～第44図)

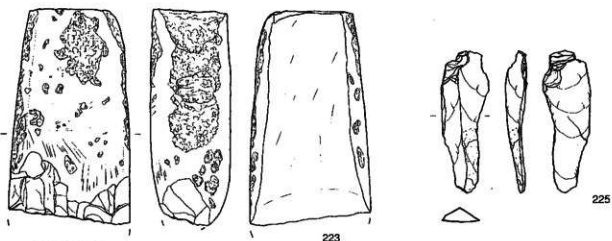
先行トレンチ内より剥片7点が出土しているが、第III層から第IV層の各包含層で出土した石器類は14点で、その出土は第III層より2点、第IV層が中心で12点である。出土した石器類を分けると、



第41图 倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(2)(S=2/3、218は1/4)

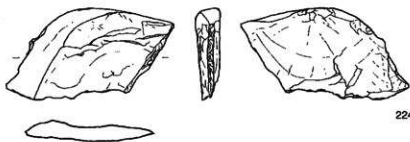


第42图 仓网第2道跡A区包含層出土石器実測図(3)(S=2/3)

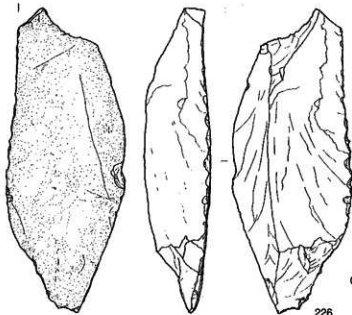


223

225



224



226



第43图 倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(4)(S=2/3)

石錘 3点、磨製石斧 4点、石皿破片 2点、磨石、敲石、磨石兼敲石、砥石、鋸齒状石器などが各1点である。石材はそのほとんどが砂岩である。

石錘 (第41図 214~216)

214~216は打欠石錘である。石材はいずれも砂岩である。216は表面にくぼみが見られる。

磨石・敲石 (第41図 217・218、第42図 219)

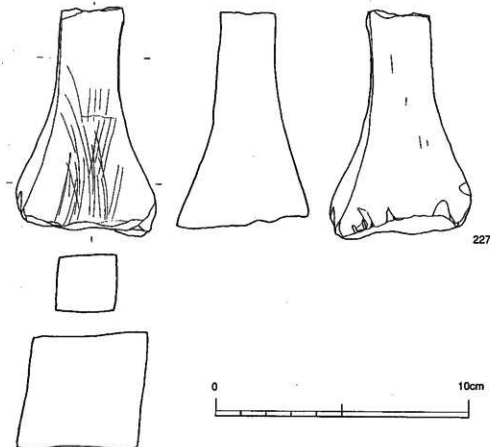
217は磨石兼敲石で、風化が激しい。石材は安山岩である。218は磨石で、裏表共によく使用されている。石材は溶結凝灰岩である。219は敲石で、第Ⅲ層から出土している。石材は砂岩である。

磨製石斧 (第42図 220~222、第43図 223)

220は完形の磨製石斧で、風化している。石材は砂岩である。221・223は磨製石斧の欠損した胴部である。表側と側面に敲打痕が見られる。いずれも石材は細粒の砂岩である。222は磨製石斧の欠損した刃部である。

その他 (第43図 224~226、第44図 227)

224は使用痕剥片で、石材は流紋岩である。225は縦長剥片で、石材は流紋岩である。226は鋸齒状石器である。石材は砂岩である。227は砥石で、四面を使用している。石材は珪岩である。



第44図 倉岡第2遺跡A区包含層出土石器実測図(5)(S=2/3)

第4節 B区の遺物

B区は、擾乱されている箇所が多く、遺構は検出されなかった。しかしながら、J7グリッドでは3つの石器(283・284・294)が放射状に集中して出土し、石器一括埋納遺構(デポ)の可能性が考えられたが、掘り込みはなかった遺物の出土状況は第45図・第46図の通りである。遺物は、表土、表土直下と第Ⅱ層から出土した。そして、縄文時代から中世にかけての各時代の遺物が同一層序より出土している。よって、各機種ごとに遺物は扱うことにする。

1 縄文時代の遺物(第47図～第49図)

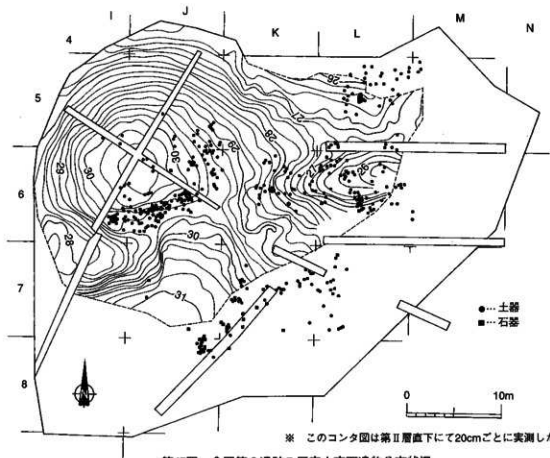
縄文時代の遺物は、縄文時代後期と思われる条痕文土器、孔列文土器の深鉢および浅鉢などが出土した。また、出土した石器は前述の通り本来の位置を離れ、流動堆積したものと考える。縄文時代後期からよく見られる扁平打製石斧が多数出土しているが、明瞭な帰属する時代・時期が不明なため、「石器」として別に扱うこととする。

深鉢(第47図、第48図 240～247)

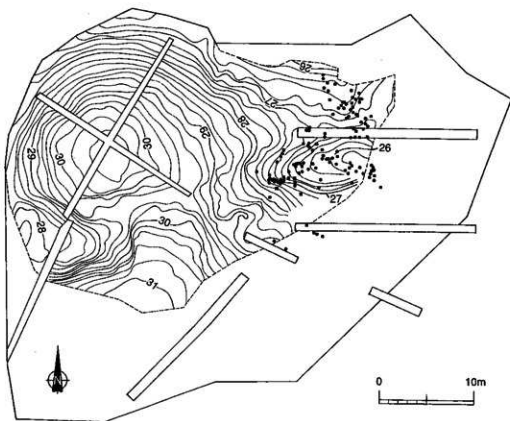
228は口縁部から胴部で、口縁は直行し、頸部と見られるあたりがやや肥厚する。口唇部は平たい。風化しているが器面調整は内外面共に条痕文が見られる。229は口縁から胴部で、口縁は直行し、後ははっきりしない。口唇部は平たい。器面調整は内外面共に貝殻と思われる条痕文が見られる。230から239は口縁部である。230は口唇部がわずかに外反する。風化が激しいが、内面に条痕文が見られる。231は口縁が直行する。口唇部が外面に折り返されたままで調整されていない。

232は口縁が直線的に開く。233は口唇部がやや内傾気味に開く。調整は風化が激しいが内外面共に貝殻によると思われる条痕文が見られる。234は口縁部が肥厚し、口唇が平らである。断面が三角形である。調整は内外面共に貝殻と思われる条痕文が見られる。235は直線的に外反する。口唇部は頸部を意識したのか、やや肥厚し、断面が三角形になる。調整は外面に条痕文が見られる。

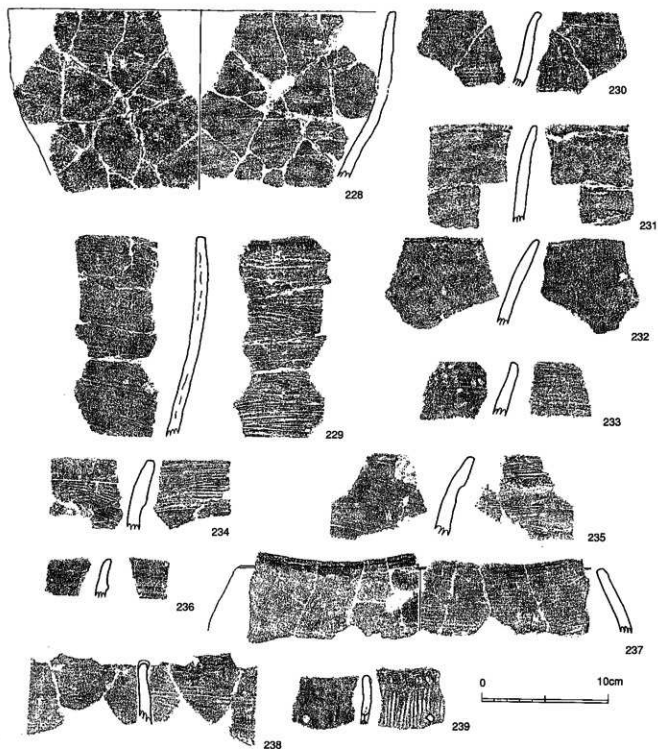
236は口縁がやや外反する。三角形のわずかに隆起した突帯らしきものが見られる。237は口縁が内傾する。口唇部は平らで、調整は風化が著しいが、条痕文が見られる。238は口唇部にリボン状の突起が付く。調整は外面に条痕文が見られる。239は口唇部外面に押圧による波状の施文が見られ、補修口と思われる穿孔が見られる。調整は外面に縦方向の条痕文が見られる。240から249は孔列文土器である。240は口縁部から胴部で、最大径と思われるあたりが肥厚し、口唇部は平坦である。地紋は内外面共に貝殻によると思われる条痕を一部ナデ消している。外面には約4.0cm間隔で径0.8cm、深さ約0.5cmほどの円形の孔列が施文されている。推定口径は38.4cmである。241は口縁部から底部で、口縁はやや内傾気味に直行し、最大径は頸部付近となる。口唇部は丸みをもつ。口縁端部はゆるやかに極浅く波打つと思われる。地紋は内外面共に貝殻によるものと思われる条痕を荒いナデで調整し、外面には約1.6cm間隔で径約0.5cm、深さ約0.6cmほどの円形の孔列が施文されている。口径は約34cm、底径は9.8cmである。242から245は口縁部である。242は地紋は内外面共に貝殻によると思われる条痕文が見られ、外面には約2.5cm間隔で径0.4cm、深さ約0.8cmほどの円形の孔列が施文されている。口唇部は平坦である。243は風化が著しいが、外面には約3.5cm間隔で径0.6cm、深さ約1.0cmほどの円形の孔列が施文されている。孔列は直線上に並はず、上方が肥厚する。245は風化が著しく調整は不明である。断面に粘土の接合痕が見られる。外面には約2.3cm間隔で径



第45図 倉岡第2遺跡B区表土直下遺物分布状況

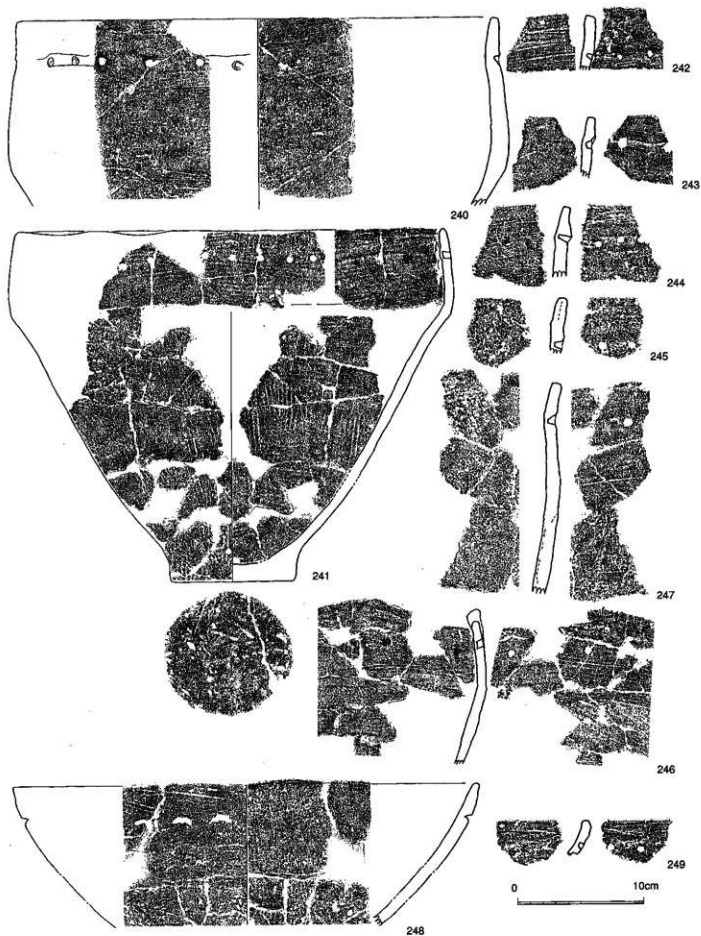


第46図 倉岡第2遺跡B区表土第Ⅰ層遺物分布状況



第47図 倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図(1)(S=1/3)

0.6cm、深さ約0.6cmほどの円形の孔列が施文されている。246・247は口縁部から胴部である。246は地紋は内外面共に貝殻によると思われる条痕文を荒いナデで調整し、外面には約1.8cm間隔で径0.5cmほどの円形の孔列が施文されている。口縁端部は波状の口縁になるものと見られるが、口唇部の厚みは一定ではない。

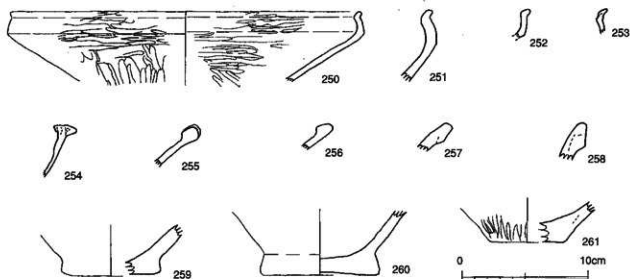


第48图 倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図(2)(S=1/3)

247は風化しているが、地紋は内外面共に貝殻によるとと思われる条痕文を荒いナデで調整し、外面には径約0.8cmほどの円形の孔列が施文されている。断面に粘土の接合痕が見られる。

浅鉢 (第48図 248・249、第49図)

248は風化しているが地紋は内外面共に貝殻によるとと思われる条痕を荒いナデで調整し、外面には約4.0cm間隔で径0.8cm、深さ約0.5cmほどの半裁竹管と思われる施文具により孔列が施文されている。推定口径は約37cmである。249は、地紋は内外面共に貝殻と思われる条痕を荒いナデで調整し、外面には約2.3cm間隔で径0.4cm、深さ約0.4cmほどの円形の孔列が施文されている。口唇部は粘土の継ぎ足しがかぶさるように外面に残る雑な調整である。250から253は口縁端部が短く外反する。254から258は口縁端部が肥厚する。250は口縁部から胴部である。調整は内外面共にミガキが見られる。251は口縁部から胴部で、粗製である。調整は内外面ともにナデである。252から258は口縁部である。252は風化が著しい。調整は内外面共にナデである。253は内面に段を持つ。調整は内外面共にナデである。254は、口縁端部を作り出した際の粘土の接合痕が見られ、内面に折り返したのみで、調整されていない。口縁の内側にわずかな稜を持つ。風化しているが、調整は内外面共にナデである。256は粗製である。調整は風化が著しく外面は不明だが内面はナデである。257・258は、口縁端部を作り出して際の粘土の接合痕が見られる。外面は三角形に肥厚し、貼り付けた突帯のように見える。粗製である。調整は内外面共にナデである。259から261は底部である。259は平底である。風化しているが調整は内外面共にナデである。260は平底である。調整は内面に条痕が見られ、外面はナデである。261は平底である。調整は内面はナデで、外面はミガキが見られる。



第49図 倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図(3)(S=1/3)

2 弥生時代の遺物 (第50図)

262は、くの字臺で胴部上位に貼付刻目突帯をもつ。風化が著しく内面の調整は不明だが、外面はハケ目が見られる。その器形から中溝式臺と思われる。推定口径22.6cm。263・264は臺の口縁部である。263はくの字口縁で、口縁と胴部の接合には、はっきりとした稜線は見られない。口唇部は平らで、平坦面は左あがりになる。264はくの字に持ち上がった口縁部は内側では稜を持つが、外側には稜を持たないと思われる。風化が激しいが、調整は内外面共にナデである。265から267は壺の口縁部で、粘土を貼り付けて口縁を成形している。265は口唇部がやや垂れ下がる。風化が著しいが、調整は内外面共にナデである。1条の刻目貼付突帯を有する。266はL字口縁で、口唇部は平坦である。1条の刻目貼付突帯を有する。調整は内面が横方向のハケ目、外面は風化が激しいが、ナデ調整と思われる。推定口径は推定口径は21.2cmである。267は266とは極めて似ている。口唇部に浅い沈線が見られる。推定口径は約12cmである。268・269は鋤先状口縁部と思われる。垂れ下がって拡張された口唇部に連続山形文が刻まれており、口縁上部には円形浮文が貼り付けられている。268は、約0.8cm間隔で径1.1cmほどの円形浮文が貼り付けられている。調整はナデである。推定口径27.8cmである。269は、約1.3cm間隔で径1.0cmほどの円形浮文が貼り付けられている。風化が著しいが、調整はナデと思われる。270から274は甕の底部である。270から272は底部が外反し、上げ底になっている。調整は内外面共にナデで、内面に指頭痕が見られる。273は平底になっているが、底部に粘土を充填した接合痕が見られる。調整は内外面共にハケ目の後、ナデ調整である。274は、底部が外反しないものの、上げ底を呈し、高台状になっている。275は甕の底部で、平底である。風化しているが調整は内面はナデ、外面はハケ目である。276は充実した底部で、わずかに上げ底である。調整は内面が風化が著しく不明だが、外面はナデである。

3 その他の遺物 (第51図)

土師器

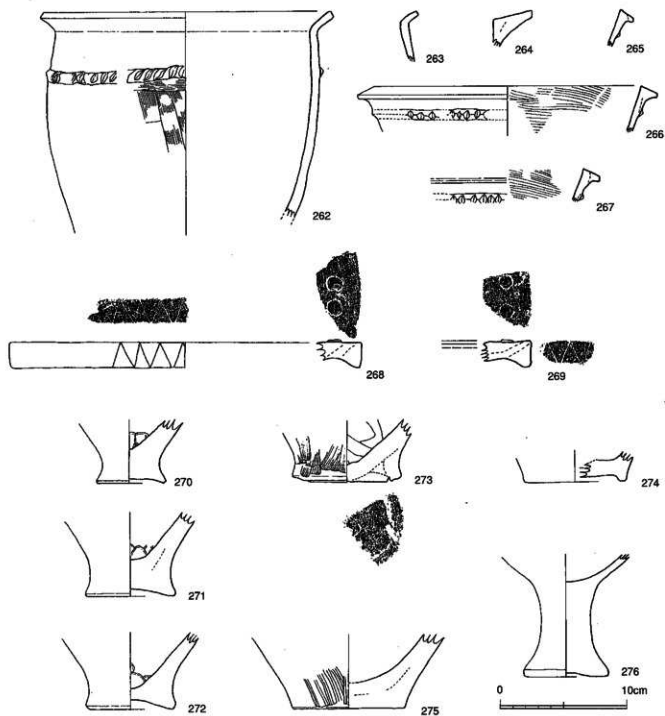
277は甕(瓶?)の口縁部から胴部で、胴部がやや張る。口唇部は平坦で右上がりである。調整は内外面共にナデである。推定口径は17.8cm。278・279は坏の底部である。279の底部には糸切り底が見られる。

須恵器

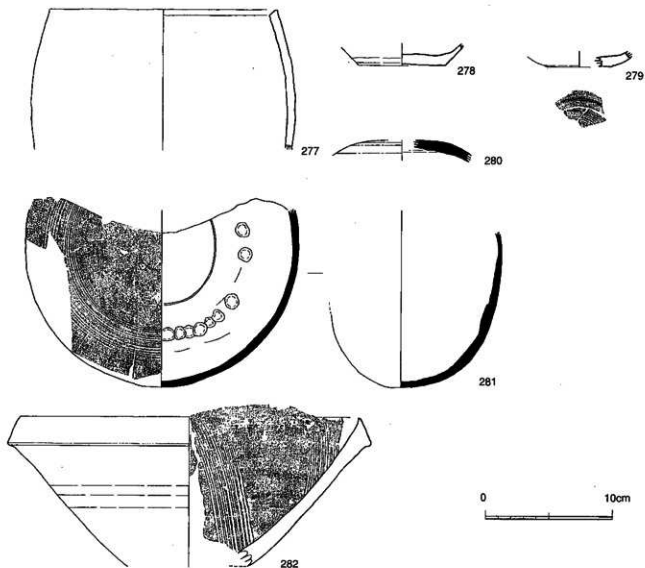
280は杯蓋である。281は提瓶で外面にカキ目が見られ、内部に指頭圧痕が見られる。C区の出土の遺物と接合した。

4 中世の遺物 (第51図)

中世の遺物は1点のみである。282は備前焼の擂鉢で内面に9条のカキ目が見られる。



第50图 倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図(4)(S=1/3)



第51図 倉岡第2遺跡B区包含層出土遺物実測図(5)(S=1/3)

5 石器(第52図～第59図)

B区で出土した石器は36点である。出土状況は第45図・第46図の通りであり、遺構に伴うものはなく、表土、表土直下と第Ⅱ層から出土した。B区で出土した石器類を分けると、打製石斧、磨製石斧、石錘、磨石、使用痕剥片などがある。その他に分類のはっきりしないものや、線刻のある石器などが出土している。出土した石器の主な内訳は打製石斧19点、磨石3点、石錘2点、使用痕剥片2点、磨製石斧1点、石皿1点、石鏃1点、石剣形石器1点、不明なもの1点と剥片5点である。

前述の通りB区は、攪乱が激しく、また、原地形は起伏に富んでおり、土器などの出土状況を見ると、縄文時代晩期、弥生時代中～後期、古墳時代、古代、中世の各時代時期の遺物がほぼ同レベルから混在して出土しており、B区出土の須恵器片とC区出土の須恵器片が接合するなど、遺物は本来の位置を離れて流動堆積したものと考えられる。したがって、同一時期と思われる形態上の特徴を有する石器は多いものの、各石器の層属時代を的確に決められない。そこで、分類した各石器ごとに、その中で扱うことにする。

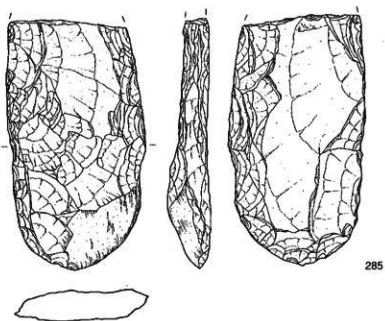
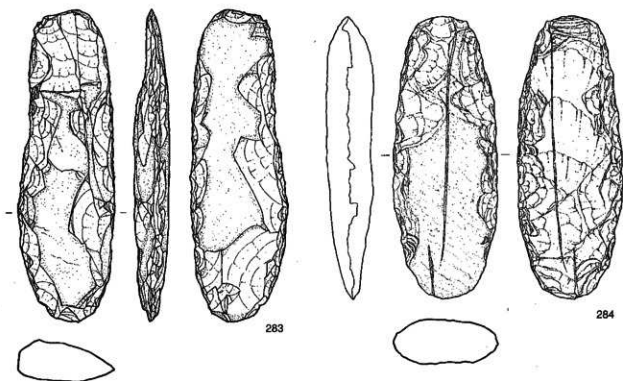
打製石斧（第52図～第56図）

打製石斧として認められたものは19点あり、石器の中では最も多い。石材としては砂岩中心である。出土層位は大部分が表土直下層であり、石斧を形態上の特徴により分類したが、その基準として、打製石斧の大きさ、刃部の形態、頭部の形態を利用した。出土した石斧を形状から大まかに分類すると、頭部と刃部の幅がほぼ同じで両側縁に挟りの入らない、いわゆる「短冊形」と挟りの入る「分銅形」に分類できる。必ずしも完形品ばかりではないので、正確ではないものもある。

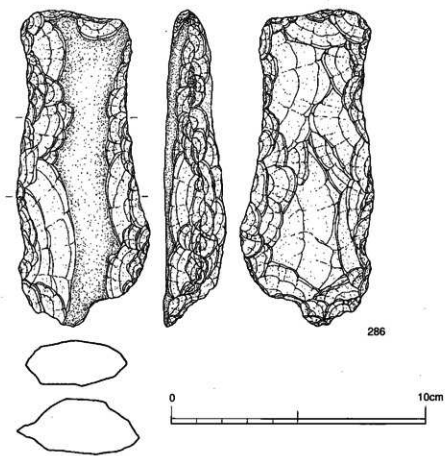
283はいわゆる「短冊形」である。側縁部は直線的である。284は「短冊形」で、側縁部はやや膨らみを持つ。刃部はその平面形から円刃を呈する。285は頭部を欠いているが形状から「短冊形」と考えられる。刃部は円刃を呈する。286は「短冊形」で、頭部が直線的であり、右縁部がやや湾曲気味で、刃部は偏刃を呈する。287は、いわゆる「撥形」で、頭部幅に比べ刃部幅が広い。側縁部はやや左に湾曲し、両側縁に挟りが入らない。刃部は偏刃を呈する。288は「分銅形」で、頭部側に挟りを入れたものである。刃部は欠損している。左側縁が湾曲する。289は「分銅形」で、刃部が欠損している。左側縁が湾曲する。290は、頭部を欠いているが形状から「分銅形」と考えられる。刃部はおおむね円刃を呈する。291は「分銅形」で、刃部は直刃を呈し、直線的に角張る。挟り部には柄を装着し、使用の際にできたと考えられる摩滅が見られる。292はいわゆる「分銅形」ではないが、挟りを入れることで頭部を作り出している。刃部は偏刃を呈する。293は頭部が直線的で、右側縁に弱い挟りが見られ、湾曲する。刃部は直刃を呈する。294は風化しているが、表裏面に自然面を残す。出土した他の石斧と比べると作りは簡単である。

その他の石器（第57図～第59図）

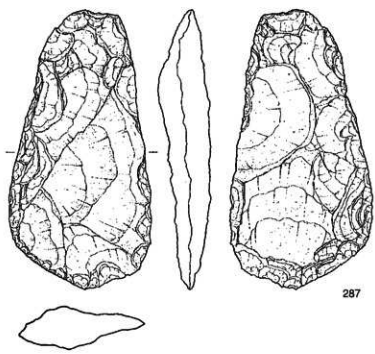
295は石鏃で、粗製である。石材は頁岩である。296・297・298は剥片である。296は二次加工剥片である。石材は黒曜石である。297・298は使用痕剥片である。石材は297が頁岩、298が黒曜石である。299は石錘である。石材は砂岩である。300は磨製石斧である。頭部と側部を欠損している。石材は砂岩である。301は石皿である。石材は砂岩である。302は磨石兼敷石で、磨石としての使用頻度が高いようであり、磨面は水平である。石材は砂岩である。303は石剣形石器で、右側縁が湾曲する。石材は泥岩である。風化しており、剥落しやすい。304は器種不明の石器で、表裏及び下面に挟りが入る。石材は砂岩である。



第52图 倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図(1)(S=2/3)

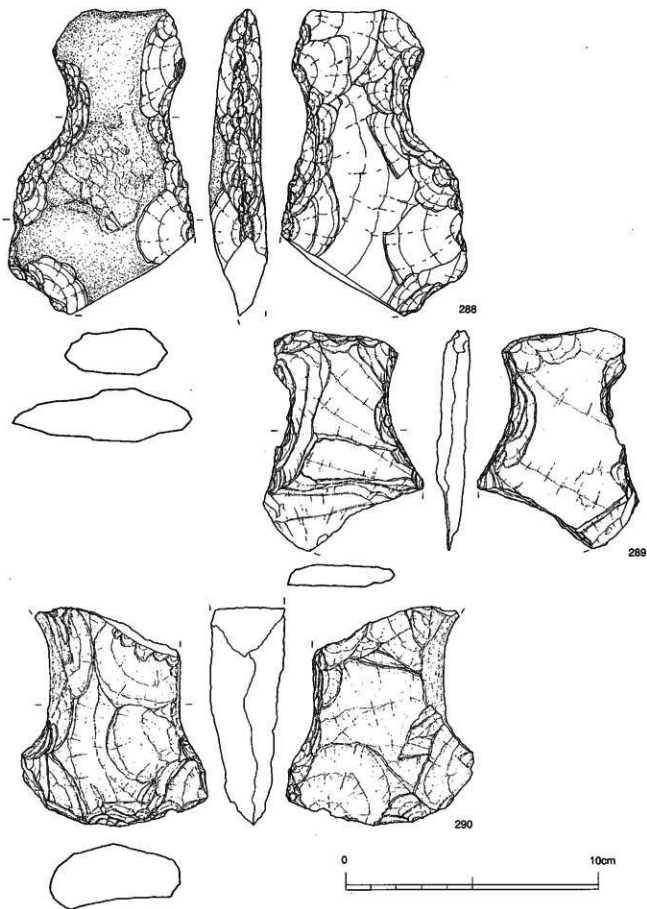


286

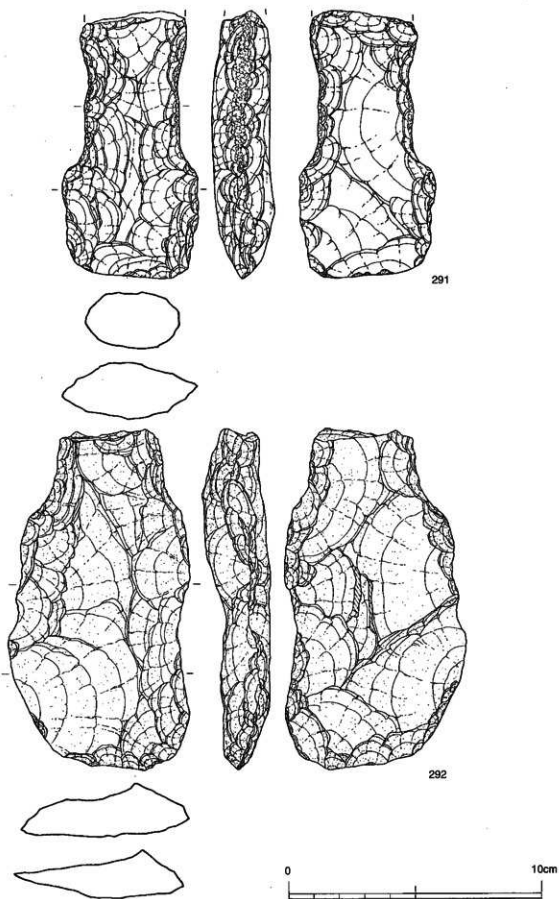


287

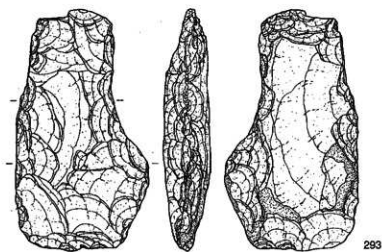
第53图 倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図(2)(S=2/3)



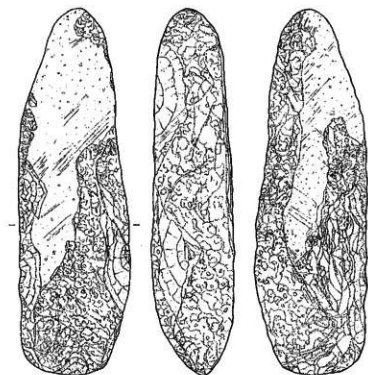
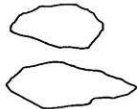
第54图 倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図(3)(S=2/3)



第55图 倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図(4)(S=2/3)



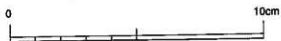
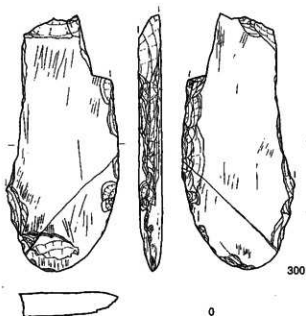
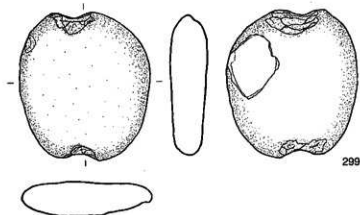
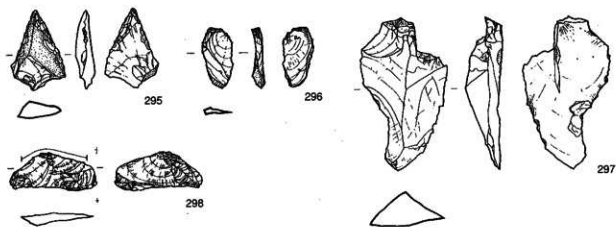
293



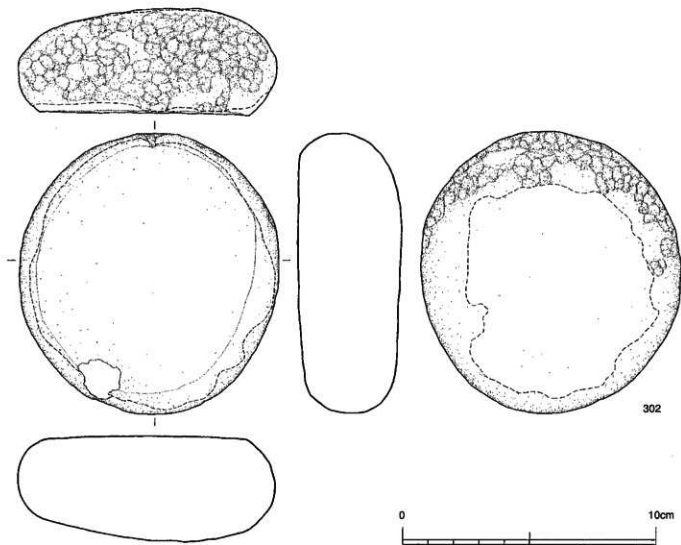
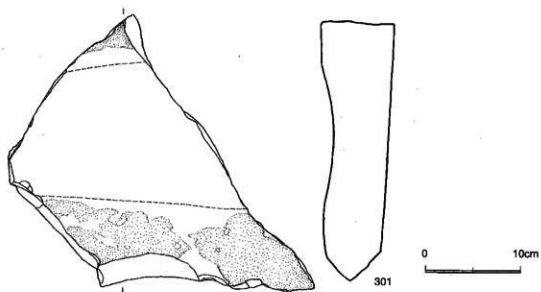
294



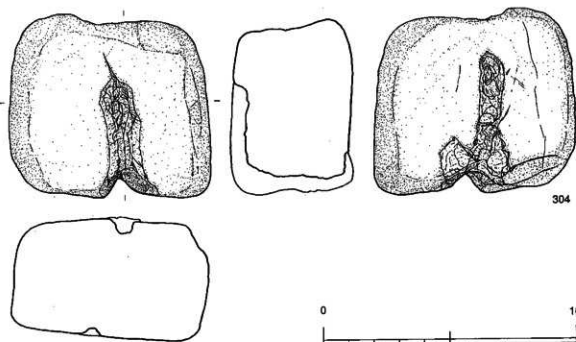
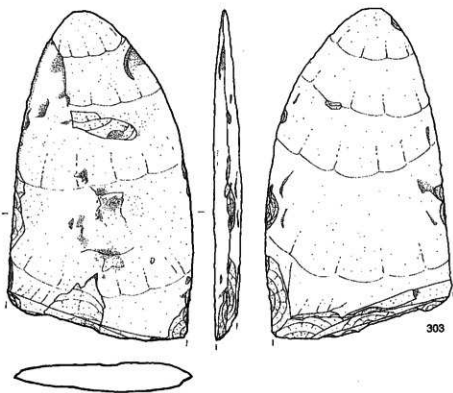
第56图 俞网第2遗址B区包含层出土石器实例图(5)(S=2/3)



第57图 盒网第2遺跡B区包含層出土石器実測图(6)(S=2/3)



第58图 倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図(7)(S=2/3、301はS=1/4)



第59图 倉岡第2遺跡B区包含層出土石器実測図(8)(S=2/3)

第5節 C区の遺構と遺物

C区で出土した土器の分布は第60図～第62図に示すとおりであり、そのほとんどが小谷部に集中する。同一層より縄文時代から近世の各時代の遺物が検出された。そこで遺物の分類は大きく時代ごとに扱うことにする。また、遺構は土坑が1基検出されたが、構築時期や性格は不明である。

1 縄文時代の遺物（第63図～第65図）

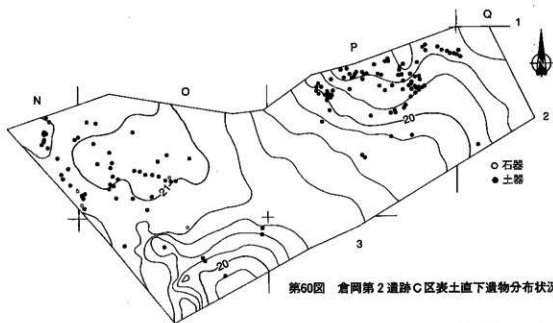
縄文時代の遺物包含層は第Ⅰ層から第Ⅲ層で、出土の中心は第Ⅱ層である。各層より前期の曾畑式土器の深鉢と後期・晩期と思われる条痕文土器や孔列文土器の深鉢、そして、浅鉢が見られる。その他石器類については別に扱うことにする。

前期の縄文土器（第63図 305～311）

305は、深鉢の口縁部から胴部で、口縁部は直線的で外反する。口唇部は平たく、刺突文が見られる。外面の文様は4条の縦区画沈線の間を連続する横沈線文で充填している。306は、深鉢の口縁部から胴部で、わずかに外反する。口唇部は先端がやや外側に尖る。施文は外面が5条の縦区画沈線を施し、連続する荒い横沈線文で充填している。内器面は3条の縦区画沈線を施し、連続する横沈線文で充填している。307は、口縁部でわずかに外反する。口唇部は先端がやや尖り、刺突文が見られる。施文は内・外面とも区画沈線文を施すことなく横沈線文を連続させている。308は、口縁部で外反し、口唇部は平たく、刺突文が見られる。施文は外面が沈線による羽状文を施し、内面は横短沈線文を連続させている。309は、深鉢の胴部から底部付近で、3条から5条の横区画沈線文を施し、その間には菱形文と斜行沈線文を密に施したいわゆる複合鋸歯文が、交互に施されている。310は、深鉢の胴部で、連続する沈線文を縦横に施している。311は、深鉢の底部で、平底である。刺突文がなく、「×」あるいは「+」で区画を行い、沈線で内部を埋めている。

晩期の縄文土器（第63図 312～314、第64図～第65図）

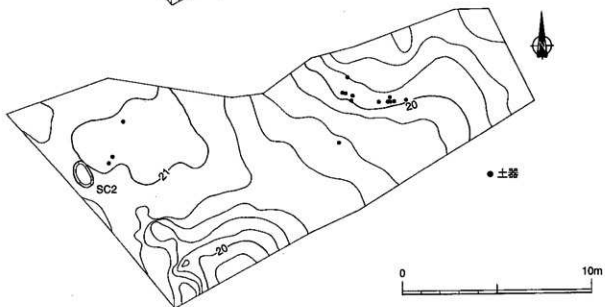
312は、深鉢の口縁部で、外反ぎみに開き、口唇部は平たい。器面調整は内外器面ともに貝殻と思われる条痕文が見られる。313は、深鉢の口縁部で、やや外反し、頸部との境が肥厚し断面三角形を呈する。器面調整は内外器面ともに貝殻と思われる条痕文が見られる。314は、深鉢の口縁部で外反し口唇部はやや尖る。口縁部の上位がやや肥厚している。器面調整は内外器面ともに貝殻と思われる条痕文が見られる。315は、深鉢の口縁部から胴部で口縁部はわずかに肥厚し、外反する。器面調整は内外器面ともに貝殻と思われる条痕文が見られる。316は、粗製の浅鉢の口縁部から胴部で、口縁部は外反する。器面調整は内外器面ともに貝殻と思われる条痕文が見られる。317は、粗製の浅鉢の口縁部で、やや内湾気味に立つ。口縁部と頸部の境が肥厚し、断面三角形を呈する。風化が激しいが器面調整は外面が貝殻と思われる条痕文が見られる。318は、口縁部で、直口する。やや肥厚し、その下に孔列文を施している。器面調整は内外器面ともに貝殻によると思われる条痕文が見られる。319は、口縁部で、内湾する。やや肥厚し、その下に孔列文を施している。器面調整は内外器面ともに貝殻によると思われる条痕文が見られる。320は、浅鉢の口縁部で口縁部が短く外反する。風化しているが、器面調整は内外器面ともにミガキが見られる。321は、浅鉢の口縁部から胴部で、口縁部は短く外反する。器面調整は内外器面ともにミガキが見られる。322は、浅鉢の頸部から胴部で、器面調整は内外器面ともにナデ調整が見られる。323は、浅鉢の胴部で、



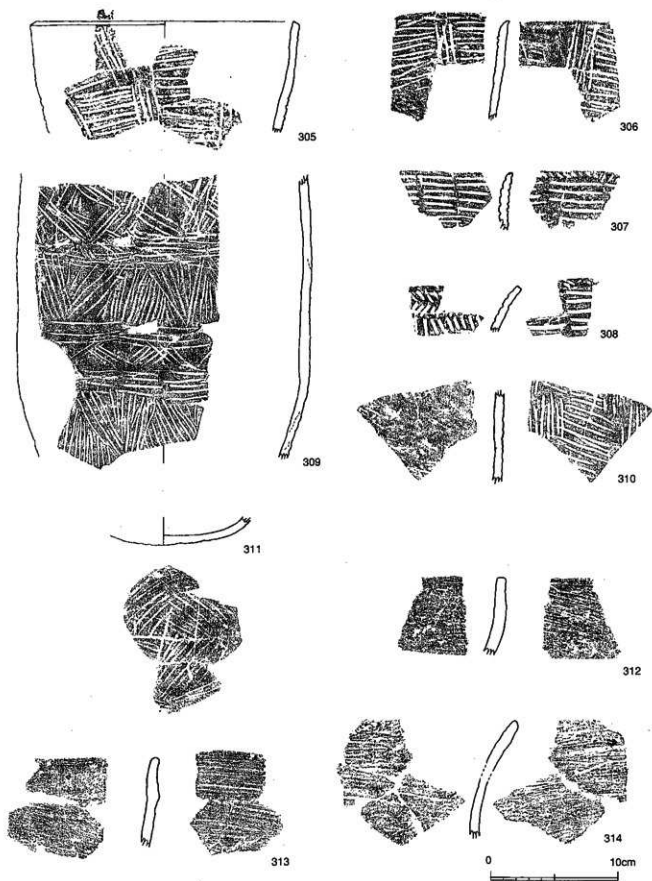
第60图 倉岡第2遺跡C区表土面下遺物分布状況



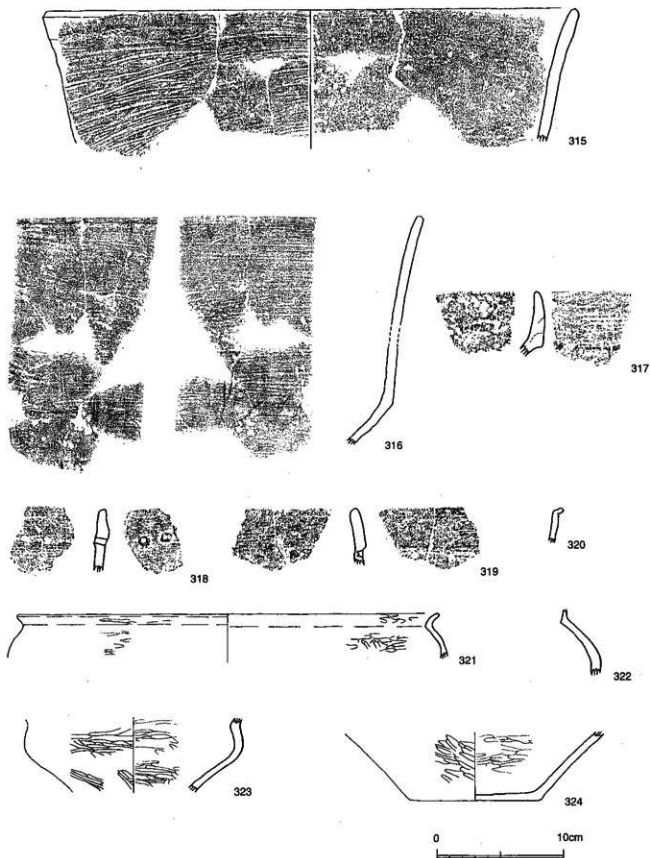
第61图 倉岡第2遺跡C区I層遺物分布状況



第62图 倉岡第2遺跡C区III層遺物分布状況

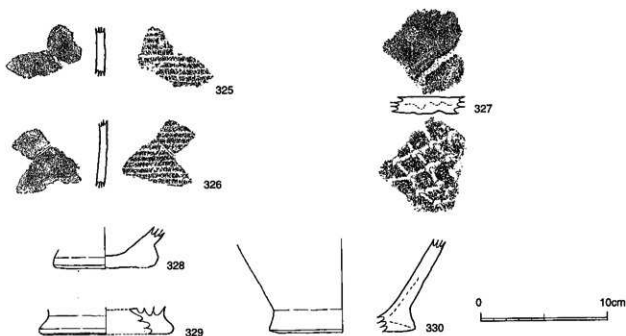


第63图 盒网第2道陈C区包含层出土遗物实测图(1)(S=1/3)



第64图 倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図(2)(S=1/3)

胴部は張っている。器面調整は内外器面ともにミガキが見られる。324は、浅鉢の底部で、内外面共にミガキである。325・326は、深鉢の胴部と思われ、外器面に組織痕が見られる。327は、深鉢の底部と思われ、外器面に組織痕（縮んだ網目）が見られる。328から330は、深鉢の底部である。



第65図 倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図(3)(S=1/3)

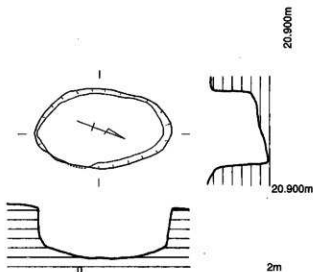
2 その他の遺構と遺物

(1) 遺構

SC2 (第66図)

C区で検出された唯一の遺構であり、南側に位置する。検出面は、C区の第Ⅲ層（明褐色土Hue 7.5 YR 5/8）である。

最大径143cm、幅85cmの楕円形の土坑で最深部は55cmである。埋土はまだら状のアカホヤ粒を含む土層の1層のみである。埋土中より胴部と思われる極小土器破片1点を検出したが、正確な土坑の構築時期と性格は不明である。



第66図 倉岡第2遺跡C区SC2実測図(1/40)

(2) 遺物

土器・土師器 (第67図)

甕 (331-335)

331は、口縁部から胴部で、口縁部と頸部の稜線が不明瞭であり、口縁はやや中太りでゆるやかに外反する。内面に粘土の接合痕を残す。332と333は、同一個体と思われ、口縁部は直行し頸部との稜線ははっきりしない。底部はやや厚い丸底である。調整は内外面ともに工具によるナデであり、底部付近外面にはヘラ状工具によるナデが見られる。334は、口縁部から胴部で、口縁は内傾気味に立つ。調整は外面が工具によるナデ、内面は荒いケズリで、粘土の接合痕を残している。335は、底部で、厚く、丸底を呈する。ハケで器面調整の後底部を張り付け、整形している。

壺 (336-338)

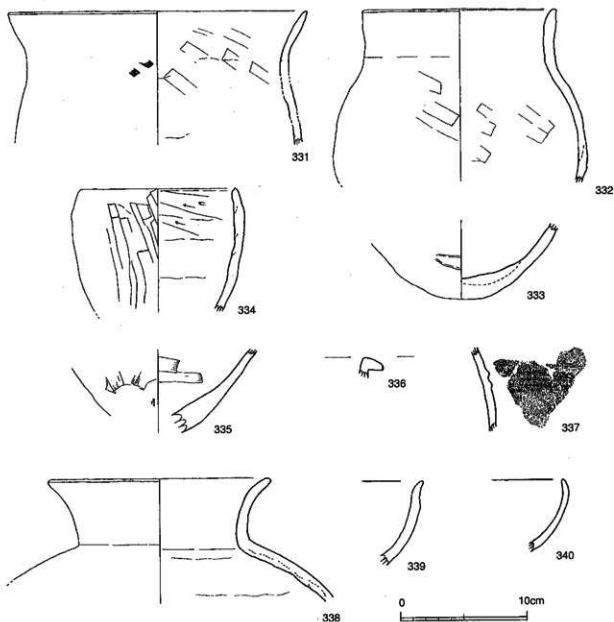
336は、甕の口縁部で、端部に刻み目が見られる。337は、胴部で2条の突帯文が見られる。調整は内外面ともにナデである。338は、口縁部から胴部で、口縁は外反する。調整はナデで、頸部から胴部に粘土の接合痕が見られる。

高坏 (339)

339は、坏部で口縁部はやや先細りで、外反する。器面調整は内外面ともにていねいなミガキが見られる。

坏 (340)

340は、坏の口縁部から胴部で、口縁は内湾する。器面調整は内外面ともにナデである。



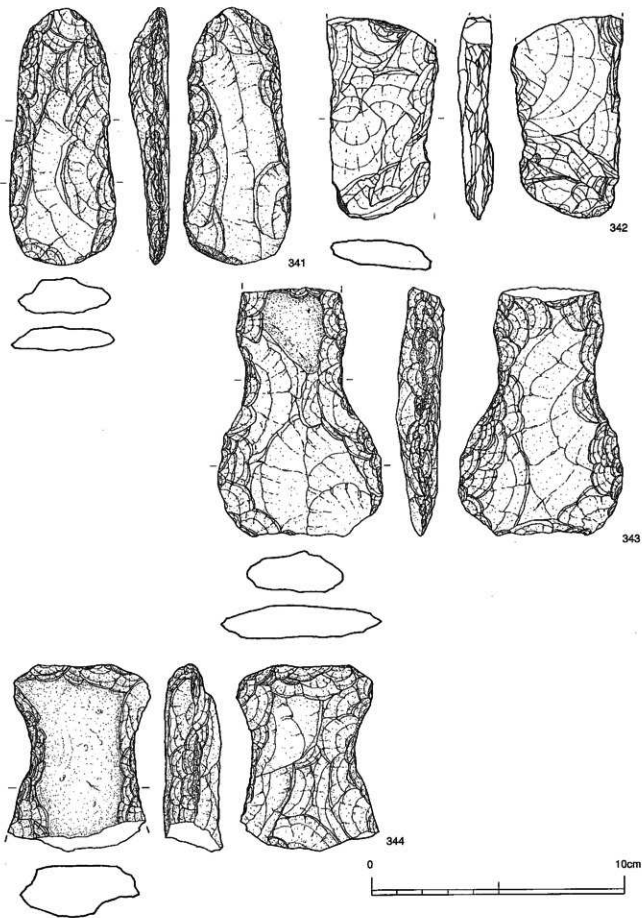
第67図 倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図(1)(S=1/3)

石器(第68図～第71図)

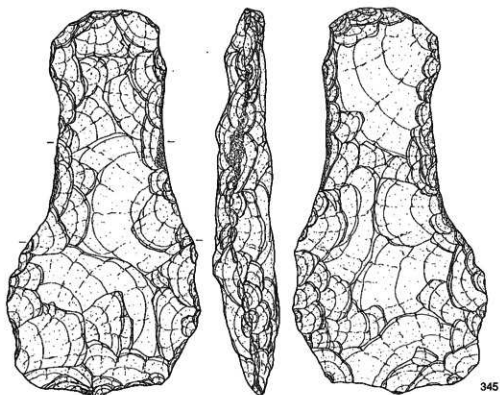
C区で出土した石器は17点である。C区で出土した石器もB区と同様に本来の位置を離れ、流動堆積したものと考えられる。そのほとんどが打製石器で11点、その他、石錘1点、石鏃1点、砥石1点、剥片3点である。以下、石器の分類項目ごとに、扱うこととする。

打製石斧(第68図～第70図)

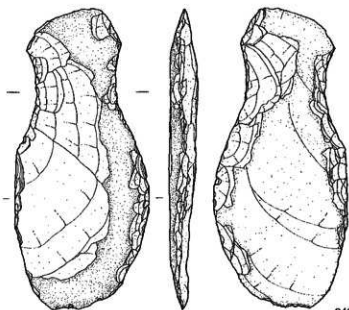
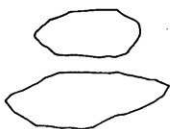
打製石器として認められたものは11点あり、石器の中では最も多い。石材としては砂岩中心である。出土層位は大部分が第Ⅱ層であり、石斧を形態上の特徴により分類したが、その基準として、打製石斧の大きさ、刃部の形態、頭部の形態を利用した。出土した石斧を形状から大まかに分類すると、頭部と刃部の幅がほぼ同じで両側縁に抉りの入らない、いわゆる「短冊形」と、抉りの入る「分銅形」に分類できる。



第68图 瓮网第2遺跡C区包含層出土石器実測図(1)(S=2/3)



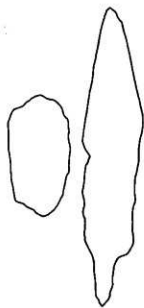
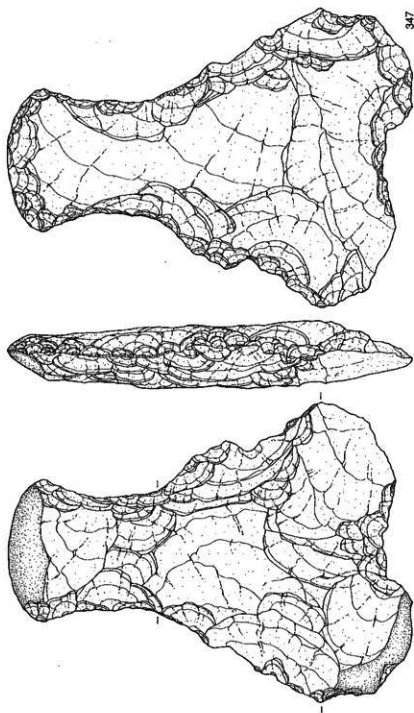
345



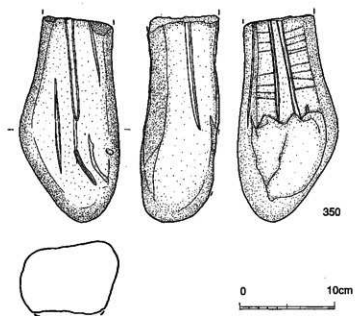
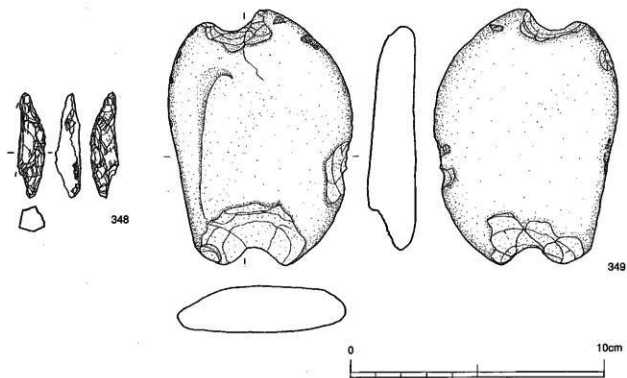
346



第69图 仓网第2遺跡C区包含層出土石器実測図(2)(S=2/3)



第70圖 倉岡第2遺跡C区包舍層出土石器実測図(3)(S=2/3)

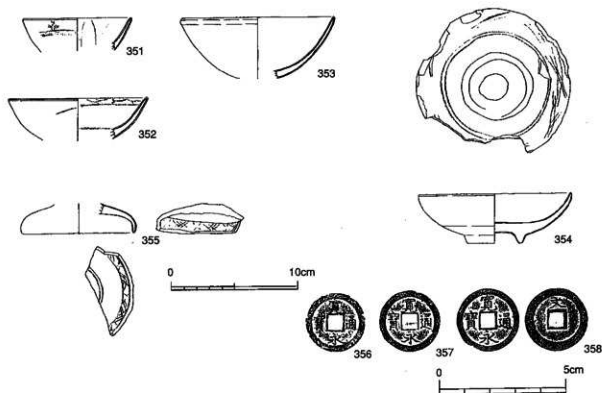


第71图 倉岡第2遺跡C区包含層出土石器実測図(4) (S=2/3、350は1/4)

341は「短冊形」で、刃部はその平面形から円刃を呈する。342は頭部を欠いているが形状から「短冊形」と考えられる。刃部は偏刃を呈する。343は「分銅形」で、頭部側に挟りを入れたものである。頭部を欠いているので頭部の形状は不明であるが、刃部はシャモジ状を呈する。挟り部は柄を装着し、使用の際にできたと考えられる摩滅が見られる。344は頭部に弱い挟りを入れたものである。頭部は直線状を呈する。挟り部は柄を装着し、使用の際にできたと考えられる摩滅が見られる。刃部は欠損しており不明である。345は「分銅形」で、頭部側に弱い挟りを入れたものである。頭部は丸みを持ち、左側縁が湾曲し、刃部はシャモジ状である。挟り部は柄を装着し、使用の際にできたと考えられる摩滅が見られる。346は頭部に弱い挟りを入れたものである。全体的に自然面を残し、出土した他の石斧と比べると作りが簡単である。右側縁が湾曲する。347は「分銅形」で、刃部が頭部よりかなり広い幅を持つ。頭部には弱い挟りを入れたもので、頭部は弧状を呈する。刃部中央に挟入部がある。挟り部は柄を装着し、使用の際にできたと考えられる摩滅が見られる。

その他の石器（第71図）

348は尖頭状石器である。石材は流紋岩である。349は大型の打欠石錘である。石材は砂岩である。350は有溝砥石である。表面に5条、裏面に2条の浅いU字形の溝が見られる。また、側面には1条のV字形の溝が見られる。石材は砂岩質である。



第72図 倉岡第2遺跡C区包含層出土遺物実測図(2) (S=1/3, 356~358は2/3)

陶磁器 (第72図 351~355)

351・352・353は、碗である。351は、胎土に、精製をあまりしていないようであり、すが入る。輸入陶磁器と考えられる。352は、18世紀末の肥前系と見られる。353は、中国産の白磁と考えられる。354は染付小皿で、18世紀中葉~末にかけての肥前系と思われる。355は蓋で、18世紀後期の肥前系である。外面は青磁、内面は四方禪文の染付が見られる。

銭貨 (第72図 356~358)

C区で出土した銭貨は寛永通宝が合計21枚である。出土した銭貨の「通」の字を見ると「マ頭通」9枚、「コ頭通」12枚が見られる。

356は「マ頭通」である。357・358は「コ頭通」である。358は裏面に「文」の文字をもつ。

第3章 まとめ

これまで述べてきた通り、倉岡第2遺跡A区では、縄文時代後期から中世にかけての遺構・遺物が検出された。特に古墳時代後期から古代前半の竪穴住居跡6軒の検出はこの地域周辺の集落のあり方を示す貴重な資料として大きな成果であった。また、B・C区出土の遺物はその出土状況から、そのほとんどが流動堆積したものと考えられる。そのため、本来の位置を保持しておらず、伴同関係や編年的前後関係などの情報を引き出すことは残念ながらできない。

倉岡第2遺跡の縄文時代から古墳時代について

C区から縄文時代前期と考えられる曾畑式土器が出土し、早くはアカホヤ火山灰降灰以降の縄文時代前期から我々の祖先が活動を展開していた場が本遺跡周辺にあると思われる。そして、A区では縄文時代後期前半の綾式土器が押し潰れたかたちで出土しており、この頃からA区は人々の活動の場の一つとなっていたと考えられる。しかし、弥生時代から古墳時代後期までの約400年間は、何らかの理由で生活の場が他に移ったためか、A区は土層堆積層が薄い上に、谷間であり造成のため後世に削平をうけたためなのか想像の域を脱しないが、遺構や出土遺物も空白である(ただし、B区からは弥生時代中期から後期の時期と思われる中溝タイプの壘が出土している。しかし、出土点数は少ない上に風化が激しく、流動堆積したと思われる)。そしてその後の古墳時代後期より再びこの地が活動の場となったと考えられる。

古墳時代後期から古代前半の住居跡について

倉岡第2遺跡の住居跡は、古墳時代後期から古代前半に至るものが検出されている。検出された竪穴住居跡は、調査面積に対して、遺構の密度が比較的高い。また、その出土遺物に時代や時期による差異が認められる。よって、竪穴住居の構築には少なくとも2ないし3時期の時期差があると考えられ、短期間に建て替えまたは廃棄などが行われた可能性が高いと思われる。

住居の分布状況や出土遺物の状況などから考えると、①SA4とSA6、②SA2とSA3、③SA1とSA5が同時期の可能性が高い。また、出土遺物を見ると、住居により出土の点数に多い少ないの差はあるが、SA4以外の住居からは高坏が見られず、全体的に壺も少ない。遺物は主に

甕を中心に坏などの日用の食器類が中心である。このことも本遺跡の住居跡の特色の1つであろう。

ちなみに上崗遺跡F区の土器編年（谷口武範氏による編年）をもとに考察を試みるに①は6世紀前半、②は6世紀後半、③は6世紀末から7世紀?の時期に相当するものと考えられる。

しかし、この時代・時期の遺構・遺物は、平安時代の遺構・遺物と共に検出されることが多いため、はっきりと時代・時期に分けることが難しい状況である。県内の各発掘調査で得られた資料の中には、当時の集落の様子を示すものは見られず、集落の一部と思われる住居跡として、新富町上崗遺跡で竈をもつ住居が1軒確認されているだけである。

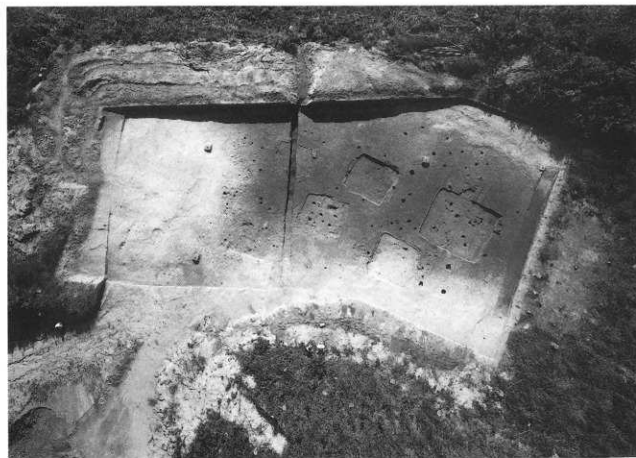
さらに、これまで奈良時代のものとして報告されてきた遺物は、律令体制下において最も抽出・分類しやすい須恵器の食器類である。しかし、在地性を強く残していると思われる煮沸具の上師器や甕などは、窯跡や墳墓からは出土しない上にこれまで良好な一括資料がなく、長い間土器編年が空白の状態である。そのため、奈良時代の遺物が出土していたとしても、明確に抽出することができないという状況にある。今回の調査によって、わずかではあるがこの空白を埋めるべく資料が得られたことは大変貴重な成果であった。すなわちSA2出土の第16図38の甕は内部に粘土紐の接合痕を残し、胴部上位に最大径をもつが、SA5出土の第22図63の甕は、内部に粘土の接合痕を残すが38に比べ頸部のくびれがはっきりせず、長胴化している。ここにこの時代の土器の系統の一部を読みとることが出来るのではなかろうか。

以上のように、倉岡第2遺跡では当初期待された中世の遺構は検出されず、この地が居住地であったことを示す住居跡を確認することができ、良好な資料を得ることができたと確信する。この調査の成果によって、この地域の古墳時代後期から古代前半における集落の様子がより一層明らかになっていくものと期待する。

圖 版



倉岡第2遺跡遠景（北より）



A地区遺構分布状況



A地区近景 (東より)



A地区中央 (南北) 土層



SI1 検出状況



綾式土器出土状況



SA2 検出状況



SA1 完掘状況 (南より)



SA2 完掘状況



SA3 検出状況



SA3 完掘状況 (南より)



SA4 埋土



SA4 遺物出土状況



SA4 完掘状況



SA5 遺物出土状況



SA5 完掘状況



SA6 埋土と遺物出土状況



SA6 完掘状況 (西より)



B地区遠景 (南より)



残存礫丘 (南より)



残存礫丘推積状況



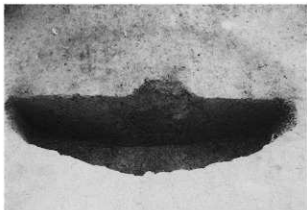
石剣形石器出土状況



残存礫丘上の遺物出土状況



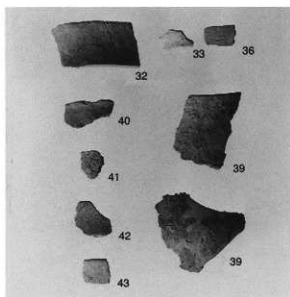
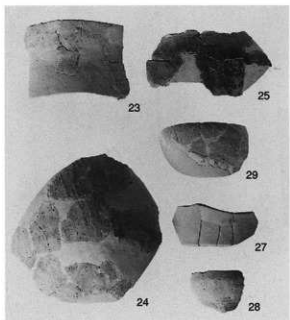
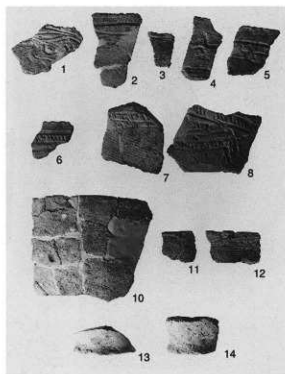
石斧 (283、284、294) の出土状況

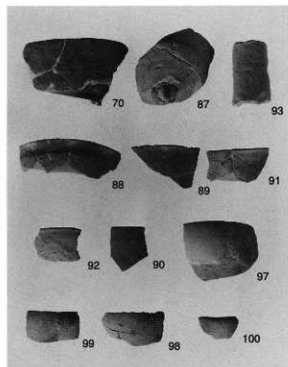
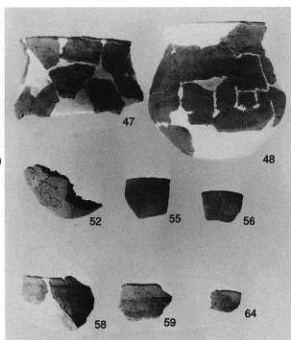


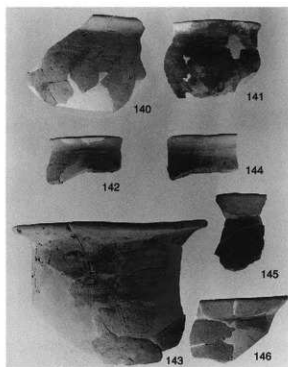
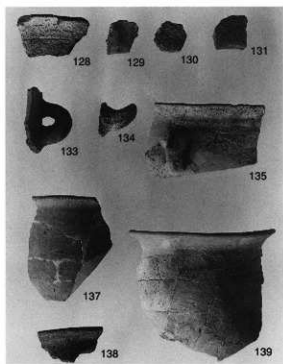
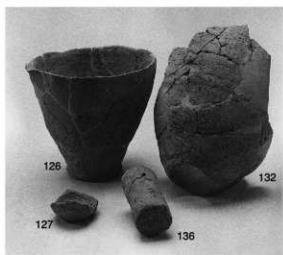
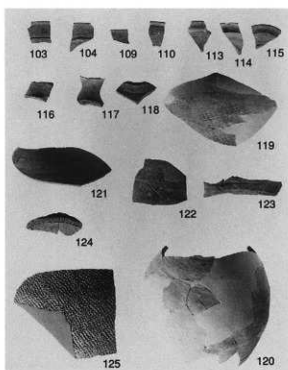
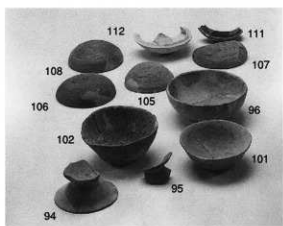
C区SC2 埋土



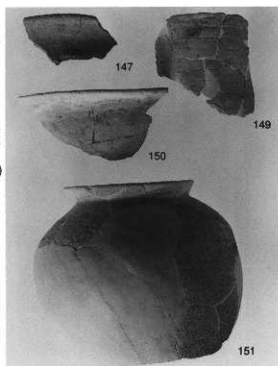
C区銃貫出土状況







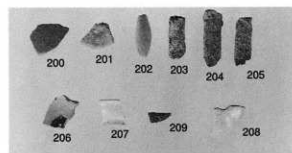
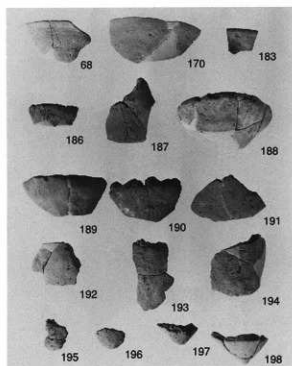
図版 8
A区出土遺物(4)

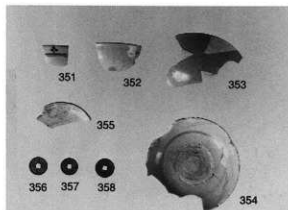
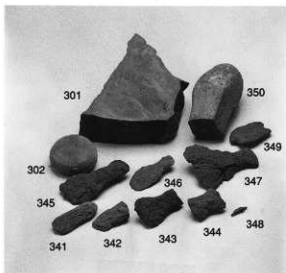
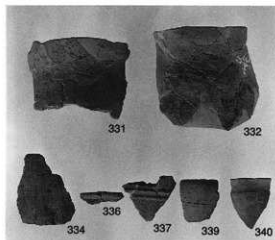
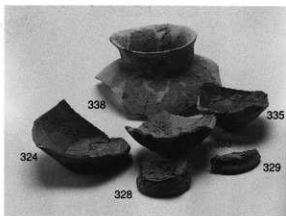
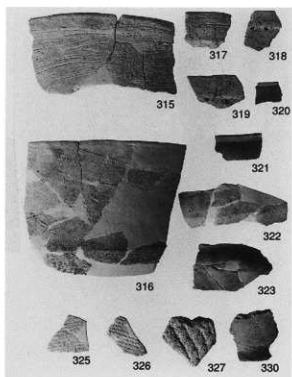
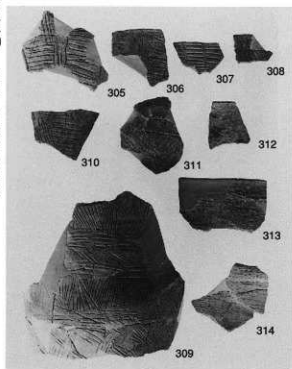


下段より175~182、184、185



下段より152~174





報告書抄録

ふりがな	くらかいせき
書名	倉岡遺跡
副書名	東九州自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第Ⅹ集
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	第48集
編集者	日浅雅道
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町下那珂4000
発行年月日	西暦2001年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
くらかい 倉岡 第2遺跡	みやざきけんみやざきし 宮崎県宮崎市 おおかみかねがきまど 大字金崎字 てらじり 寺尻ほか	45302		31°	131°	19970512	2,203	道路建設
				57′	21′	?		
				45″	47″	19971108		
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
住居跡 散布地	古墳時代後期 古代前半	竪穴住居跡6軒 土坑2基 集石遺構1基		縄文土器 土師器 須恵器 布痕土器 打製石斧		縄文時代後期の 綾式土器出土		

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第47集

倉岡第2遺跡

東九州自動車道(西部～清武間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書X

2001年3月

発行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎県宮崎郡佐土原町大字下那珂4019

TEL0985(36)1171～2

印刷 株式会社 都城印刷

〒885-0055 宮崎県都城市早鈴町1618番地

TEL0986(22)4392℡ FAX0986(22)4891